SPRING 12

1972 Feb.

大手前高校自治会

巻頭言

自治会員の絶大な協力によって、12号は完成しました。

ここに、読んでゆく時の注意の向け方を掲げておきます。

一、可能性の過剰は現実性の過少をともなう。

二、不統一は統一の契機である。さらに、不統一こそ統一の一形態である。

これは、12号が成功である、といえる媒介になるものであります。

目次

表紙デザイン　2ノ1　石間毅史

巻頭言　1

✡新入生へのことば　卒業生へのことば　4

✡自治会について

これからの自治会のめざすもの　後期自治会長　樋田武明　5

前期会長として　前期自治会長　笠井俊和　6

✡座談会『制服について』　7

✡評論

無の地平での存在論への挑戦　2ノ1　石間毅史　9

スプリングとは　3ノ2　野端哲朗　10

戦友に送る　3ノ7　堀幸雄　11

修学旅行仕末記　2ノ7　奈良隆司　12

文化祭の二つの要素　くわばらあきら　12

✡座談会『文化祭を終って』　14

✡クラス紹介　全クラス　17

✡クラス紹介 …… 全クラス …… 17

✡先生の紹介 …… 43
朝田先生　佐野先生　近松先生
長谷川先生　渡辺先生　広田先生　椋井さん

✡他校訪問記 …… 48
北野高校　扇町商業高校　明星高校
淀川工業高校　寝屋川高校

✡表紙はかく語る …… 52
2ノ1　石間毅史

✡文芸その他
絵物語「月と生駒と」 …… 53
2ノ3　向井里美
「革命前夜」 …… 58
2ノ1　間淳郎
修学旅行の歌撰集 …… 59
2年7組
浦島太郎 …… 61
3ノ4　副島正純
源氏物語 …… 62
3ノ7　堀幸雄

カット
3ノ8　高城良枝
2ノ1　筒井美恵子
2ノ8　小沢佳代子

新入生へのことば

御入学おめでとう。

入学のよろこびと新しい出発への意慾とで一杯でしょう。このときに一つ強調しておきたいことがある。

大手前高校生となるということは古くからの伝統のある大手前の枠の中にはまりこむことではない。君たち一人一人が大手前の構成員として今までの大手前に新しいものを吹きこみ付加してゆくことである。君たち新入生によって大手前はより新しくより高い水準へと生れかわっていく。「大手前の○○君」であるよりも「○○君たちの大手前」という気持をもってほしい。

この三年間は長くはない。ひっこみ思案であったり消極的であったりすれば三年間は無意味なものとなり、君たちはただ「大手前」を通りすぎるだけとなるだろう。そうではなく「大手前」が君たちに何かを植えつけ、そして君たちが「大手前」に何かをプラスするためには、君たちが全身全力で大手前にぶつかりとりくむことだろう。勉強にもクラブにも思い切りエネルギーを注ぎこもう。先生にも級友たちにも積極的に働きかけよう。

このスプリングは大手前のある断面を示しているがすべてを表わしていない。大手前の真の姿や真の価値は、君たちの主体的意慾的努力や、成功の喜びや挫折の悲しみを通して理解されることだろう。

卒業生へのことば

御卒業　おめでとう。

このときに、三年生に次のような設問をしたい。

高校というのは一つの集団でありまた社会であるが、この中で、三年生は如何なる役割をになうべきであるのか、そして君たちはその役割をどの程度果したといえるのか。と。

三年生は学校全体にいくらの問題提起をしてきた。例えば一学期の「自治会祭規定」である。一、二年生も三年生が提起した問題点をある程度うけとめた。問題は提起されたがその発展と解明への努力はどうであっただろうか。一、二年生だけに押しつけられた形になっていたのではないだろうか。一、二年生は手さぐりで模索を続けているといえる。種子はまかれたが花は咲かずに終ろうとしている。そして来年また種子はまかれるであろう。

三年生は大学受験をひかえ精神的余裕も時間的余裕もないことは事実だ。だからといって、大手前の構成員であったのから脱して、第三者的傍観者になっていたのではないだろうか。

このことは三年生だけに対して向けられる設問ではなく、一、二年生にも共通するものである。

学校を去るものも残るものもこの機会に考えるべきであろう。

これからの自治会がめざすもの
共同共感体の提言

後期自治会長　樋田武明

私たちは大手前高校に通学する高校生であり、同じ言葉を話し同じ文字を使う日本人でもあり、第一に人間であります。これらのいくつかの点において私たちは、共通点を持っている。いくら日本人であることと高校生であると言うことをその共通点から取り去ってしまってもなお、私たちには人間であると言う最終的な共通点の原点が残っている。たとえどんなに異なった風俗や習慣、主義や主張を持っていても、皮フの色が異なっていても、私たちが人間である限り最も根本的基本的なレベルすなわち「人間」というレベルで理解と言うより共感しあえるはずであります。そういった万人共通の人間的な共感を基調にした共同体が共感共同体であります。現在あらゆる既成の価値感や概念が崩壊しつつあります。そして、そのような変革期を生きている私たち高校生は、その中で何も信じることができなくなり、人生の指針を失いがちであります。そんな私たちにとって、ふれ合い感じあい確め合うことによって与えられる人間レベルでの人間的共感を通じた相互理解は今後増々重要なものになって来るでありましょう。

さて、私たちの日常（主に学校）生活に目を向けて見ましょう。毎日決まった時間に学校に来てその日の教科書の進みぐあいや宿題などに気をもみ、四時間目には、食堂で何を食べるかを考える、といったように（これがすべての人にあてはまるとはけっして思えないが）外界からの刺激に対してただ、動物的に反応を示すということだけに終始しがちな学校生活であります。そこには、人間的な共感を交換し合う機会が少なくなりがちで、また、毎日の生活が単調で無味乾燥なものにもなりがちであります。

人間がただ一人で孤立して生存することは、多くの場合不可能であるかあるいは非常に困難であります。やはり、学校生活を有意義で生き甲斐のあるものにしていくためには、生徒同志の人間的な精神の交流が必要欠くべからざるものでありましょう。そのようなふれ合い感じ合って確めあう人間的な魂の交流というものを中心となって行っていくのも自治会の大きな仕事の一つであると私は信じる。

そして、私たちの自治会は、今後そのような人間的共感を基調とした私たち独自の共同共感体の形成をめざしてゆくべきでありましょう。そういった意味で現在自治会の行っているフォークダンスの会、レコードコンサート、討論会などには十分意義を見いだすことができ、けっして刹那的でも享楽的でもないと言えるでありましょう。

共感共同体を形成すると言うのは簡単だが実際は容易なことではない。たがいに共感しあい認め合って生きてゆくためにはまず自分自身の生き方や意識について責任をもつ必要がある。

「世の中が悪い、社会が悪い、自治会が悪い、政治の貧困だ。」と常に自分は正しく他はまちがっているというふうにしなければ気がすまない、他罰ばかりして被害者意識だけの人はいないだろうか。「俺はだめなんだ。」「全ては私が悪いのデス。」というふうに自罰ばかりしている人はいないだろうか。また「自分はあと一、二年

もすればこの学校にいなくなるんだ。」とか「そんなもの我々だけで何ができるものか」といった考えから生じた無関心やあきらめの気持やこんな他罰。自罰主義や被害者意識を持っていてはたがいに共感しあい認めあって生きてゆくことは難しい。

人間の人間的共感を基調とした私たち独自の共同共感体の形成。それはやさしいことではないがやっていかなければならないことであると思う。そして、それは、自治会員一人一人がやりはじめなければならない。自分はなにもしないで他人に期待したり依頼したりすることはできない。自分がまずやり始めなければ誰れもやってくれない。共感しない。私と一緒にすぐ始めよう。教えてくれ、私も教えよう。助けてくれ、私も助けよう。教科書はいらない、地図もいらない。そんなもの私たちで作っていこう。そのためにもまず私自身からここに出発する。

前期会長として

前期自治会長　笠　井　俊　和

もうすぐ三年生になろうとしている僕だが、二年前期に自治会長を務めたことは、大きな経験だった。そして今一度自分の活動をふり返り、自治会とは何であるかを熟考することが僕の義務であると考えるので筆をとる。

半年間の僕の活動にはさまざまな批判があった。「行事のみに追われた」とか「遊びすぎた」とかいう声が少なからずあったようだ。確かに僕らの任期中は行事中心でやって来た。これは真の自治でないという人もあるだろう。事実「自ら治める」という姿からはかけ離れているかも知れない。

しかしこゝでもう一度行事はどんな意義をもっているかを考えてみたい。人間同志がすぐうちとけあうのはむずかしい。それにもまして大手前高校では対話とか協力とかいったものが不足していると思う。行事というものはそのような生徒同志のつながりをつくる媒介のようなものだと思う。自治会はそんなツマラないことそんな初歩的な活動をするのかという疑問もでるだろうが大手前には現在生徒同志のつながりが最も重要なのである。そして任期を終えた今考えると自治会行事はそのつながりを作り出したと思っている。それは「目的」ではなく「手段」だった。その次の段階として自治会の本質的な活動がある。本質的な活動のためには、生徒の一人一人が自分たちの学校生活についてはっきりした意見をもちそれを発表することが必要である。そして執行機関はその意見を集約し中心となって運営するためのものだと思う。それはどんな内容についてであってもよいと思う。

しかし、この事は非常にむずかしい。生徒が関心を持つことはもちろん、執行機関が生徒に関心のある活動をすることも困難をきわめる。生徒の方から考えてみると自治会活動に対する関心を持つことと学業成績にも大学受験にもあまり関係がないからだ。これは若者の人間性の問題であろうと思う。考え悩むことは高校生の特色でそれが当然自治会活動の原点になるべきだろう。

僕もこれから一自治会員として悩める高校生活を過すつもりである。自治会の質的な発展を期待している。

われた」とか言って、[illegible]
確かに僕らの任期中は行事中心でやって来た。これは真の自治でな

座談会

「制服について」

司会　二年五組から制服について考えようという提案が出ていますが、ここでも、制服についてどう思うか聞いてみたいと思います。まず、制服について、どんな感じを持っていますか。

A　あつくるしい。

B　軍服に似ているので、外国人が日本に来たときに軍国主義のような気がする。それに堅苦しい。

司会　女の人の感じから言ってどうですか。

C　男子と女子とでは違うと思うけど、制服を着て集団の一員であることの自覚をするのよ。

D　自由の象徴だと思う。

司会　暑苦しいとか、堅苦しいとかいうのなら、制服を例えばGパンとかに変えたらどうでしょうか。

A　肉体的には窮屈でなくなるけれど、精神的には堅苦しい。制服という制度がある限り、堅苦しさから抜けられない。

司会　制服という制度についてはどうですか。

F　今の状態で結構いけてる。画一化されているが、わずらわしい感じがしない。自由化しても、結局同じような服装になってかわりがなくなると思うんですが……。

司会　自分の好きな服を着て行くと、たとえそれがみんなと同じ服になっても、制服と本質的に違うのではありませんか。

A　そう思います。

司会　話を続けましょう。

D　みんなが同じ服を着ているので、学校へ来ても何も考えずに話ができるんです。

A　元に戻りますが、堅苦しいと言ったのは、家へ帰って服を着替えると何となく自由で解放された気になるからなんです。

D　制服はみんなが同じものを着ることに意義があります。つまり外での貧富の差を学校内にもちこまないためです。

司会　今の社会では富の不平等を認めていますが、どうして学校内でだけ平等であるようにするのでしょう。

D　社会人と学生とは本質的に違うから、家での貧富の差をそのままもちこむ訳にはゆかないんです。

G　社会人と学生とは本質的に全く同じですよ。

D　学生は一種の寄生虫だと思います。

H　学校で解放感を感じる必要もないし、少しぐらいおさえつける感があっても構わないと思いますよ。

司会　制服自由化は今の形に問題があるのか同じものを着るということに問題があるのかどちらでしょう。

I　形の点では改正、制服という制度については賛成です。

B　制服反対と言ったのは肉体的苦痛で、形を変えたらまた、考えも変わるかもしれません。

G　ちょっと聞きたいんですが女の子がブラウスとか靴下

まで規制されると、窮屈と感じますか。

C　もしそうなれば拘束になってしまうわ。

I　そうなったら絶対反対します。

G　それと今の制服とどう違います？

C　うんそうやね。でも、制服を着ることが束縛だとは感じていません。制服に憧れることもあるし。

D　束縛と感じようと感じまいと制服を着るのは義務だと思います。

F　修学旅行のときでも、びっくりするような服を着る人がいるので、自由な服を着るようになると関係のないことにまで頭を使うようになってしまう。

C　それに自由な服でもあまり高価な服を着ないで下さいと言ったら、それもやっぱり束縛になってしまうわ。

A　でも、人間の欲望の中で、好きな服を着たいという欲望も、ある程度大きな位置を占めていると思います。自由が全く束縛のない状態だとは思っていませんが制服を脱ぐことが、より自由になるのではないでしょうか。

司会　ここで　制服の機能ということについて、ちょっと考えてみましょう。

C　制服を着て連帯感を深めるというのは、もはや機能ではないと思います。

司会　制服を着た状態にあるということが、あたかも平等のように見えるというのは事実でしょう。風紀の問題、非行の防止ということについてはどうですか。

H　非行に走る人はそういう条件があるからで、制服を着ているからと言って、非行の防止ということにはなりません。制服など着ても同じですよ。

F　私服だと普通の大人と変わらないから例えば煙草を吸った場合でもわからない。制服だとそんなことはしませんよ。

A　前にも言ったけど、人間は自分の好きな服を着たいという欲望がある。それをもっと重視すべきだと思います。

D　でも、好きな服が着られないからといって欲求不満になる人はいませんよ。

G　個人の情緒とかを伸ばすためにも、私服にした方がいいと思います。

D　学校は勉強する所で、制服の方が勉強しやすくはありませんか。

A　それは人によって違うことでしょう。

話し合いは、この後も続きましたが、結論のでる性質のものでもありませんし、紙面の都合上、ここで、終わることにします。

内容においても、つっ込みが足りない所があって、残念でしたがこれを土台にして、皆さんの意見の形成に役立てば、幸いです。

評論

無の地平での存在論への挑戦

(Es ist der Weg des Nichts den wir gehen.)

2ノ1　石間毅史

このような大それた、或いは馬鹿げてみえる題を、笑わないでもらいたい。

これを、例の「Sein und Zeit」の如き、恐ろしい書物と、対峙させるつもりは、さらさらないのであって、要するに、一つの作文を表わす、一つの題でしかない。

E・A・ポーの黒猫の中に the spirit of perverseness という言葉がある。犯してはならないと思っていながらそれにもかかわらず、ある行為を犯してしまう、人間の原始的な性質であるという。また、埴谷雄高は、この言葉から、断崖病という考えを生み出している。これらは、僕らに、大きな示唆を与えると言わねばならない。即ち、僕らの存在への欲望には、その裏に　無への衝動を隠しもっているのだ。この定立は、ある意味で、極めて暗澹としている。矛盾であると決めつける人がいるかもしれぬ。しかしながら、これは、ほんとうに矛盾しているであろうか。ほんとうにそれほど不可解なものであろうか。これを考えてゆくには、先づ僕らの存在の場所を知らねばならないであろう。そこで、もう一度、先人の言葉を借りてみる。

「人間は自然のなかにあって何ものであるか？無限に比べると虚無、虚無に比べるとすべて、無とすべてとの中間者……」

―パスカル―

正にこのとおりではないか。突然、存在に投げこまれた僕ら、その途端死に向かう僕ら。完き存在ではない僕ら、非存在でもない僕ら。かくして、僕らの存在の場所は、敢えて云うなら、〈ない場所〉であることが判明したのだ。

始まりの詩

無は大いなるものだ。
僕たちはそいつのものだ。
口で笑い声を立てながら
僕たちが存在のまっただなかにいると思う時無は敢えて泣くのだ。
僕たちのまっただなかで。

これは、リルケのある詩を変えたものだ。次に、メビウスの輪と題する、僕の、詩とは云い難いかもしれぬ詩をあげる。

メビウスの輪には内部も外部もない。
――さながら、ある詩人のための薔薇のように――
だが、そこに充実せる存在はない、
そこには、空虚な深淵しかない。

そうして、それは、僕を絶望へおいやる。
僕は、どっぷりとつかっていく。
その刹那、メビウスの輪は、存在につきまとう無を、僕に開示する。

これで、〈ない場所〉というニュアンスは、分かったと思う。問いかけるものが、はっきりした今、先程の問いかけの答は、より僕に近づいたように思える。あの定立は、正しく必然的であるのだ。結論を急ぎ過ぎたと思うべきではない。なぜなら、あの定立は、逆に、僕らの存在の場所〈ない場所〉を指示するという性質を持っているからだ。

「自分がいやになる。」この嘆きは、今まで書いた事を、確実にする。もう少し詳しく言うとこうなるだろう。
「僕は、今のような存在には、満足できない。何か他の存在になりたい。」
〈ない場所〉に堪えられなくなったのである。しかし、何か他の存在というのも、僕らが到達するや否や、〈ない場所〉の様相を帯びるのに違いない。
そうして、「存在は不快を噛みしめなければならないのだろうか。」というつぶやきは、増々、重みを増して僕にのしかかってくる。

スプリングとは!?

3ノ2　野端哲朗

スプリング十二号発行に際して、十一号がスプリング本来の目的を逸脱したものであると非難されていることは十一号発行に若干関係のあったぼくとしては、極めて遺憾なことであるとともに、反面極めてうれしいことである。そういう意見があるということは、少なくともスプリングの重要性を認識して下さっている人がいるということなのであるから。だから、ぼくはここに喜んで反論をかかせてもらう。

そもそも、スプリングの発行の意義ということは一号以来毎年取り扱われてきたことである。概して一号以来数年の間はスプリングは硬い感じで内容を見ても、校長との座談会、討論会、アンケートの結果発表等、あらゆる問題の提起の場であった。しかし、何かの理由で、しだいに内容がくだけたものとなり、大きな転換期であった十号以来の状態が十一号にも引きつがれ現在のようなことになっている。そこでいま問題になるのは、その何かの理由であるが、それについて考えると、まず第一に想像できることは、問題提起が十分に効果を示さなくなり始めたこと。第二に、本部と新聞部が一体化し始め、当初のスプリングの役割が変化してきたこと。第三に、自治会本部にあった記事の焦点が自治会の末端部に位置するクラスクラブといった基本的な単位に移ってきたこと。第四に、自治会本部がスプリングに力を入れず、主に文化部にその仕事を委託したこと。以上のようなことが思いつかれる。

自治会の機関誌であるというその性質上、このように本部がその

3ノ2　野端哲彦

発行に情熱を傾けなくなってきていることは全く残念なことであるが、ここで大切なことは発行の仕事にたずさわるのは、本部（今は文化部）であっても読む者は自治会会員であるという事実である。

従って問題の提起が常に本部からなされていることは少し問題である。だから、主体は常に自治会組織の末端に位置するクラス・クラブになくてはいけないと思うし、発行という仕事が文化部に委託されていることもある程度うなづける。

このように考えていくと、十一号の編集方針に大きな誤まりはなかったように思うのである。しかし、内容がうすっぺらいものであったことは拒めまい。ぼくの理想は、本部は全くノータッチであるのにもかかわらず、クラスなどよりどんどんと問題が出されそれを本部が次々と奉仕部を通じて解決に努力するというような状態で、その導火線にスプリングがなるというものであった。

十一号は導火線にしては少々湿り気がありすぎたのである。ぼくはどんなにふざけていても、硬い内容でなくても、内容のあるものはやはり存在すると思うし、討論会、座談会等の記事で並べていくことだけが、実のあるスプリングを作る方法だとも思わない。

十一号は確かに本来の目的には接近しえなかったかもしれない。しかし、それがくだけすぎた内容に起因するのだと考えることは少しばかりあせりすぎだと思う。

いろんなことをかいたがこんな考え方もあるのだと十三号、十四号…の主体となるべき現在の一、二年生の諸君が認識され、スプリングをよりすばらしい自治会の機関誌に高めていって下されば幸いである。

の性質上、このように本部がその

戦友に送る

3ノ7　堀　幸雄

若者は絶えず反問する。

我々は今何をすればいいのかと、

また、今我々は何をしているのかと

そう思うのは我々が考え過ぎる一茎の葦からかもしれぬ。

しかし、いずれにしろ多くの若者は現代に疲れている。ある者は社会体制（受験も含む）の前に、またある者は人間愛等に大きな挫折感を感じている。……としたらはたして過言だろうか？

今僕は高校生活にピリオドを打たんとしている。三年にわたる自分の自分による自分のための闘いの結果決して甘い実ばかりではなかった。打ちてしやまんの僕のそれは、むしろ矢つき刀折れ無惨な敗戦に終わったと言ったほうが適切かもしれぬ。

自分自身や友と騒ぎ、喜び、苦しんだ帰りはせぬ三年の回顧が空しくも胸によみがえってくる。その間、ぼくは善戦したつもりだ。いやまだ勝敗は決したわけではない。何故なら僕はまた新たな人生の戦場へ向かおうとしているからだ。君達が送る（送りつつある）年月もこういった経験から極端にはずれることはなかろう。

現在において、その努力こそすれ、僕達は君達の苦悩やフラストレーションを解消し、よりよきものに先導するには、今はあまりに力不足の感がある。僕達の戦いにあえぐかもしれぬ君達にできる事は慰める事と励ます事しかない。

己の理想とする真実を求めて、精一杯戦ってくれ給え。矢つき刀折れたら、歯がある、つめもある。倒れたら、君達の心臓が鼓動している限り、歯をくいしばり立ち上がり給え。

いかに君達のまわりが、暗昧で混沌としていようとも、今の君達に後退や妥協はありえないのだから、前進するしかないのだから。

新しい人生の岐路へと僕達は向かいつつある。そこもいかに明るかろうと暗かろうと戦場にはかわりがないのだ。そして君達も僕達の歩んだ道をすぐに進んでくる。そして逃れられぬ永遠の戦が我々全てを釘づけにするだろう。

しかし、かくも短かき人生において、それがいかなるものであろうとも一生に一度勝てばいいのだ、また勝てなくても、そのプロセスこそが重要なのだ。勝てずして人生を立派に戦い抜いた人は世間にも多々みられる。

歴史に挑戦するもしかり芸術や科学の研究これまたしかりだ。前途は暗いながも開けているのだ。互いに一回の勝利を得るために、エリート主義等にこだわることなく、真に考える生物として、戦友よ徹底抗戦を誓って壁を打破するために肩をかし合って進もうではないか。

修学旅行仕末記

2ノ7　奈良隆司

（修学旅行についてのむつかしい見解をのべるには少し能力が足りないから　思ったことをそのまま書いている。）

ぼくは内心、この旅行が二十年後の話の種としかならないような旅行にならねばいいのにと思っていた。ただ思い出のためだけに、こんなにも大げさな旅行をするなんてばかげている。

好天にめぐまれ、まったく足を使わなくても済んだぼくたちの旅行は、もろもろのたのしさがあった。ぼくたちはあるところでは、万葉の歌人となり、あるところでは太ったアルメニア人のように食べ、そして、ああ、そしてあるところでは藤式部丞のように賢しい姫君の品定めをもやったのだった。

まあ、本筋にもどろう。ぼくはたのしかったとだけ書いた。修学旅行はこの一語に尽きると思っている。たのしさの中に、ぼくたちは、現代生活で失なわれゆく連帯感を強くしっかりとつかんだのだ。学校にいるときは、なんだかとっても疎外感、自分はひとりでしかないんだという疎外感を抱いていたぼくも、みんなと同じなんだなあという、ほっとするような気分を始めて味わったのだった。ぼくたちは、先生がいわれたように一晩中、人生を語り明かすなんてことはしなかったけれど、――某集団は、一時近くまで女子の部屋で密談をしていたという。――心の中ではお互い理解しあっているんだと感じていた。

文化祭の二つの要素

くわばらあきら

現在の高校の文化祭には二つの要素があるといえる。その一つは「マツリ」を強調するものである。日本の地方の祭を見てみるとその多くは皆が集って儀式を行ないそのあと皆で歌ったりおどったり

酒くは内心、この旅行が二十年後の話の種としかならないような

の多くは皆が集って儀式を行ないそのあと皆で歌ったりおどったり

する。その地域や社会の構成員の交歓が中心となっている。本校の自治会祭はこの交歓を主な目的としているといえよう。

もう一つの要素は「文化」を強調するものである。研究発表とか平素の活動の紹介を中心とするものである。これは展示とか上演をするものであるから、見せる人と観客という二つのグループへの「分離」がおこり、「マツリ」が一つへの融合をもとめるのと対称的である。そして「文化」のレベルが問題となる。

本校の文化祭では今までは「文化」の要素を重視していた。他校では「マツリ」の要素を強調するところも多い。本校では「マツリ」は自治会祭で「文化」は文化祭で、という風に分離されていたといえる。

本校では文化祭に「マツリ」と「文化」の二つの要素をもりこもうとする働きかけが数年前から行われていた。それは「クラス参加グループ参加の拡大」というスローガンのもとに進められている。それは「文化祭とは何か」「文化祭とは大手前生徒にとって何であるのか」という論議から「参加するとはどうすることなのか、どういう意義を見出すべきか」という討論をへて進められたといえる。その結果として今年の文化祭は「文化」の要素に「マツリ」の要素を付加したといえる。

しかし、その結果としては一つは「文化」の質の軽視と、もう一つは自治会祭との性格の接近となっている。自治会祭　文化祭とも生徒の自治活動の結集であるべきなのだから、自治会員の意志によって性格づけられるものではあるが「文化」と「マツリ」の正しいバランスと調和とが文化祭には絶対必要だと思う。そしてそれを真に支えるものは、自治会員の自主性と自発性と創造力とであろう。

座談会

文化祭を終って

A　今年の文化祭は今までとは大分性格も変って生徒の中でも好評のようだ。この文化祭についていろいろと話しあいたい。全部見ていないのですべてについては無理だと思う。気のついたことをどうぞ話してほしい。

B　昨年の文化祭では、大手前の生徒がOMMや松坂屋にまた他校の文化祭に流れて、大手前には昼間は無気味なほど人が少なかったが、今年は大分にぎやかだったな。

C　本部が何とかして生徒が校外へ流れ出ないようにいろいろと考え一般の生徒の文化祭への積極的参加を呼びかけたのが良かったね。クラス参加は昨年が一つに対して今年は十一クラス。二年生は八クラス参加だった。

A　その点で本部が一学期から文化祭についてクラス討議をしたのが良かったわけだ。といっても文化祭規定からいえば一学期から準備するのは当然なのだが。しかし、いわゆる「顧問制」の問題では自治会祭での苦い経験もあって本部としては仲々気苦労だったと思うね。

C　三年生は、自治会祭のときに問題提起をして本質論の討議をくりかえし本部に要請していたが、文化祭のときは、議論疲れのためかそれとも受験勉強で忙しくなったためかあまり三年生は「顧問制」をとりあげようとはしなかったね。あまり論議していると文化祭ができなくなってしまうということを懸念したのかも知れない。一、二年生は文化祭をやることを前提にして考えていたようだったね。

B　毎年「顧問制」が論議されるがこれは本部にとってはむずかしい問題だな。

C　本部が文化祭のムード作りに力を入れて「統一テーマ」の設定ワッペン（ステッカー）の作製など新しい試みをしているね。

A　統一テーマの「大手前の昨日今日明日」はちょうど都合よく井上順之の歌もあって特に閉会行事の雰囲気をもり上げるのに効果的だった。また、前校長坪井先生の講演のテーマも同じものでお話の中で大へん良いテーマだとほめておられた。

B　皆でテーマを考えることは、「文化祭とは何か」を問いかけることになり、その意義は大きいな。

A　展示については、毎年いわれているがもう一つぴったりと来ないね。見る人の立場になって内容や形式などを考え、もっと皆にアピールするもの、共感と興味をもたせるものがほしいね。

C　それがなかなかむつかしいことで、見せる方から言えば大へんな苦労をしてるのだ。見る人もその苦労を吸みとってほしいね。準備のために二週間くらいは勉強の殆んどすべてを放棄してまでがんばっているのだから。

A　公害問題、沖縄問題もとりあげられていたことは評価すべきだがつっこみが不足だったね。精神薄弱児の展示もあったね。社会問題を学生の立場からどうとりあげるかが問題だね。

C　本部では水俣病の映画を上演することも考えていたが費用の関

係でできなかったそうだね。

B　お化け屋敷はやっている人たちは楽しいのだが文化祭としてはプラスアルファがほしいな。マジック的なものとか心理学的なものを加味して「文化」の面が見られるようなものを！

A　一年生のクラスでアンケートの結果を展示していたがあれは興味深かった。そのデーターは残しておく価値があるね。それと二年生のクラスの「日本庭園」は展示第一位と思う。公害の中の大手前に、緑と水と静けさと更に日本情緒を実現したことで。

B　アイデアもよかったし腕も良かったな。

A　講堂行事について。まず二年生の三クラスの「ドタバタ劇」はどうだろう。大へんな拍手喝采だったが。

C　僕は二年生だから出演者を殆んど知っているので人物がステージの上に出現するだけで面白い。それぞれの個性がわかる。いつもは見せない点があらわれる。表情がちがう。何といっても女生徒が美しく魅力的に見えて見なおした。

B　内容は田舎芝居以下だが、とにかく楽しいね。客席とステージとが一体になっている。青少年会館でやるとこんなには面白くはないだろうな。アングラ劇場的雰囲気だな。しかし「ワルノリ」もたのしいがもう少し内容の深いシリアスな劇もあってほしいな。

A　三つの劇ではどれが良かった？

C　どれもそれぞれ特色があって面白い。ドングリの背くらべ？国定忠治になった人はさすが面白かった。セリフをとちっても平気、何回でもくり返すところがうけたね。それと近松先生と中塚先生の御出演は良かった。自治会祭での「裸の王様」の裸の浅野先生につぐね。先生の中の三大スターだね。

B　英語の単語をおぼえなくてもセリフはおぼえるね。

A　講堂ではないが、一年のクラスの「父帰る」は劇も古いし人形劇という形式もテレビ全盛の現在では古くさいのだが案外面白かったね。

C　人形のつくり方も、動かし方もセリフもお世辞にも上手とは言えなかったが

B　観客も多かったし熱心に見ていたな。こういうものをやろうという意欲を大いに買いたいね。

A　「のどじまん」　プライド高き大手前生が出演してくれるだろうかと心配していたが、私の心配は大はずれで出演者（希望者）が多すぎて時間不足だった。

C　下手なのに厚顔しく歌うところが最大の魅力だ。大手前ストレス（？）が一べんに吹飛ぶようだ。

A　大手前生の非大手前性が見られるね。

C　審査員の先生生徒の評点のデタラメなことがまた面白い。司会者も仲々ユーモアたっぷりでよかった。

B　見ていない人には、この面白さはいくら説明してもわからないだろうな。

A　来年は青少年会館でやりたいという声も出ているね。第二日の方にうつりましょう。カミユの「誤解」は読むための劇と思っていたが演劇部としては大へん上出来だったね。

C　本部では水俣病の映画を上演することも考えていたが費用の関

B　高校生にはこのような一見とりつきにくい劇でもやりやすいのかも知れないな。カミュの「実存」には共鳴できない私だが、劇は面白かった。

C　講堂での三つのクラスのドタバタ劇とはレベルが全くちがうね。各クラスでこの程度にできればたのしいのに。やはり演劇部だけのことはあるね。ＥＳＳの英語劇は探偵ものの英語がわからないと全く退屈になるね。といってあらかじめあらすじを知らせておくと面白くないし……。毎年英語劇は問題となるね。舞台ははなやか、衣装はデラックス、出演者も多数で注いだエネルギーは大へんなものだね。

A　ブラスバンドは昨年とは全くちがって立派だったね。

B　音がきれい、よくハモっている、リズムが軽やか。たのしい音楽だった。

A　音楽部のコーラスは？

C　昨年くらいから「たのしく」ということを前面に出しているがこれは一つの行き方だが……結果は最上とはいえないようだね。

A　コーラス大会で「レモンツリー」は予選からのくり返しの練習で皆食傷気味で、決勝ではどのチームもサラリと流して勝負に自由曲できまったようだね。

C　毎年三年生が圧勝するが三年だけ数クラス合同できるのはクラスの男女比のアンバランスのためだがやはり人数が多くなるので有利となるのは明らかだね。一チーム五十人以内に制限すべきだという意見もあるね。

B　二年六組の「涙をこえて」は新しいタイプのコーラスとして注目すべきだろう。

C　決勝では予選のときより不出来だったようだね。

A　もう少し決勝のとき出来がよかったら上位進出もできたと思う。トランペット、タンバリン、ギターも入り、ボリュームも圧倒的。特に歌っている人の表情が生き生きしていたね。

B　コーラス大会は自由曲の選曲が決定的だな。三年八組の「仏法僧」は選曲で大分トクをしているね。

A　最後の青少年会館での閉会式（閉会行事）は？。

C　とにかく　フィナーレを飾って、エネルギーの大爆発といえばオーバーだが…　とにかく感激的といえるね。

B　三年生も良かったと評判がいいようだな。

A　笠井会長をはじめ本部役員の性格がよく生かされていたね。

C　「ワルノリ」の大典型だね。

B　来年はどんな文化祭になるか、心配でもあるしまたたのしみでもあるね。

A　最後に　ファイヤーは？

C　去年のは雨が降ってみじめだったが、こんなにたのしいものとは予想しなかったね。

A　進行もスムーズだったね。三年生だから三回経験したが今度のが一番すっきりしているように思うね。

C　ロウソクが良かったね。その暗さの中でロウソクの光の中の女の子の顔がとても美しく見えた。その顔がしばらく忘れられなかった。それから僕も恋人が無性にほしくなった。

A　ロマンチックだったね。大手前の思い出の中のトップだろうか。縁の下の力持ちの人たちのこともふれたいがこのくらいで終りましょうか。

目すべきだろう。

ましょうか。

クラス紹介……全クラス

1年1組

日本の同志のミナサン、壱年壱組のクラス紹介であります。ハイ。まずは学級写真でありますが：：あんなもんでございましょう。（深く追及しすぎるというのは御法度でございます。）要するに、この頃はまだ角隠しがとれてなかったのと見うけられるのでございます。

しかしながら春の遠足を過ぎる頃になりますと、おのおのがたの器量が惜しげもなく（恥も外聞もなく）発揮される時が来たのでございます。それはなんと、排球大会男女共学年優勝（ダンジョキョーガクではナイ）果てはおのこらは全校優勝、女の子ちゃん達は全校第二位という偉業を成し遂げたのでございます。当然といえば当然のことながら、皆々様、大儀でございました。（ヨヨ…ホロリ）

というのが一歩前進のさまでございますが、肝心なのはこれより後の二歩後退ぶりなのでございます。まずの一歩は自治会祭で、ウチは「占い」をやったのでございますが、その様子を絵にしますと、一コの白いてふてふがのたうちまわっている、という風にしかならないのでございます。それから二歩めでございますが、これは何を隠そう一学期末テスト、ウチはなんとドンジリであったのでございます。それ以来、壱組は憂劣司賀離のクラスだという声が内々よりも（オこは）外よりもささやかれるようになったのでございますが、時は流れる、光陰矢の如し、無事に長月を迎えたのでございます。

しかし、真夏の暖房負けか、漆にかぶれたのか、水泳大会は振るわなかったのでございます。ことでへたっては、と頑張ってみたコーラス大会も、私めが帰ってしまったせいか（スイマセン）鼻の差か、予選で落ちてしまったのでございます。

けれど（逆接ばかりでスイマセン）（スイマセンばかりでスイマセン）さすがは壱組の面々、運動会では学年第二位の活躍だったのでございます。それから文化祭では何もなさらなかったのでございます。そいでもって、中間テストがございまして、不思議なことには、ウチの成績がよかったということでございます。（しかし一歩前進があると二歩後退するということを忘れてはいけません）

秋の遠足のみかん狩りで、みかんを28個も食べた人がいるというのはどっちでもいいのですが、LHRで「小さな巨人」を見に行った時、映画の終わった後拍手をした人が数人いた、というのもどっちでもいいことなのでございます。

この頃から幾度目かの二歩後退が始まるわけですが、籠球大会では、おのこらは黄色い声が足らずに負け、女の子ちゃん達はゴールのリングに網がなかったので、どこにそのモノがあるのか見えず負

27組

けたのでございます。はたまた、おのこらの蹴鞠大会も、誰の足が長いのやら短かいのやら、負けてしまったのでございます。あはれ。

そうしているうちに（二学期末テストはとばして）クリスマスパーティーの日がやってきたのですが、これも「だいへんだ。ずーばまんがとんでいく」という謎に包まれた言葉で終わってしまったのでございます。これの発生地というのもまた謎に包まれておりまして、チロリン村の村長さんの御子息（誰だかわかったら頭をナデナデしてあげます）の辺が怪しいという一説もございますが、いずれにせよ、これで終りなのでございます。

そだらば　あじゃあじゃ。

1年2組

いままでのスプリングの慣例をもって推察するに、小生の書くところのこの雑文（これは謙遜です）は、クラス紹介の2番目にはなやかに登場するのであろう。さらに思うに、これを読む諸君様はこの文をクラス紹介の2番目に読むのであろう。ちゅうことはやね、結局、読者、特に新入生諸君は、まだこの文あたりまでは清新なる感動をもって読んでくれるということである。かどうかはわからん。

そろそろ乱れてきた。まず事実の羅列といこう。バレーボール大会、一回戦敗退。水泳大会、最下位無得点。（幸か不幸か、この年度から記録を残すことになった。つまり、この輝やかしい記録は栄誉あるわがクラスと共に未来永劫までも残るのである。諸君、めでたいではないか。といいながらも、小生はあふれでるくやし涙をおさえることができない。）また乱れてきた。先を続けよう。体育祭、ほまれ高きラービー賞。（この不可思議きわまる賞については、ここではその実体にふれないでおく。といいながらも、小生はくやし涙をおさえることができないのである。）これ以上乱れたら、拾収がつかなくなるので、もっと乱れることにする。バスケットボール大会、サッカー大会、共に一回戦敗退。諸君!!これらの事実に感動しないか。何？しない。おお君はかくもすばらしき2組をバカにするのか（といいながらも、小生はあふれでるアホらしさにあくびをもよおさずにいられないのである。）

ところまで書いてきたら、もう書くことはないのである。2組とはそんなクラスである。一人一人の顔をみまわすと、（おそらく諸君は四十五人全員みまわす前にびっくりして転倒するという事態におちいるであろうが。）みんなそれぞれに個性はあるんであるんであるんで……しつこいようだからこの辺でやめる。それが四十五人まとまると、おお、なんということであろう。諸君。そうなのだ。そうなのである。実にそうなのだ。わかるかね。なに、わからん？そうだろう。その通りだ。実におとなしいのである。

そのくせ、先生はよくおこらせた。指折りかぞえて、何回だか忘れたが、とにかくおこられたのである。おお（この文には『おお』という語をまことにおおく使っている。その理由は、小生が巨人ファンだからなのであると書きながらも、小生はあふれでる涙を……めんどくさい。疲れた。）わがクラスはなんとつまらぬクラスだろう。欺瞞（ギマンと読む）と無関心に満ち満ちたわがクラスの絶声

さえることができない。）また乱れてきた。先を続けよう。体育祭、む）と無関心に満ち満ちたわがクラスの絶声

（ミスプリではない。まさに声が絶えるのである。なぜか？これ以上は私個人の身の安全のため申しあげられません。）のビ女（美女とも媚女とも書けないのである。美を愛する者の良心が許さない。）と、いるのかいないのかわからなかった男どもバンザイ。ラ・ヴィエ・ベル。（仏和辞典でもおひき下さい。）

幕を降ろせ。喜劇は終わった。　ーラブレー

1年3組

入学式、始業式の時こそ何とも思わなかったが、今考えてみると、クラス分けの時、先生方は調査書を見て特に始末の悪そうな生徒を三組に集めたのではないかと思う。

このクラスは正直に言って一学期はまじめで、たのしいクラスだとはあまり言えなかった。乱れたのは二学期からである。かつてはトランプ、花札が流行し、N会（ナポレオン愛好会）発足という事実もある。が何といったって最高に乱れている点は、やたら「ギャグ」がクラスじゅうに蔓延しているということである。みんな一つでも多くのギャグをヒットさせようと血まなこになっているが、ほとんどがシラケているのが現状である。みんなの話すことギャグ一筋である。

こんなクラスだが、みんなが一致団結してがんばったこともある。コーラス大会などは朝昼、そして放課後に、練習に練習を重ね、一次二次予選を突破し、青少年会館での決勝でゲベッタをとったこともある。また、サッカー大会では男子は日ごろの欲求不満がつのっていたせいか、みごと学年優勝を遂げたこともある。もっとも他はみな遠慮ぎみである。

とにかくこんなクラスだから授業風景も想像がつくだろう。地理の時間はみんな童心にかえり、一心不乱に書き方のおけいこをしている。人間はひたすら一つの事にうちこんでいる姿が一番美しいと言うが、この時間のみんなの顔は確かに実に美しい。生物・現国の時間は、オネンネの時間である。教室の移動の前は大阪城がとなりにすわってこちらを見つめていたので、つまらない授業の時は大阪城とにらめっこしたこともあったが、移動後は見るものもないのでただ夢の心地を楽しむのみである。地学の時間は、内職やらオネンネやらで一生懸命話しておられる先生の顔を見るのが気がひけて気がひけて……。せめて筆者ぐらいと思うのだがやはりそうはいかない。数学・英語の時間だけやたらまじめな事は陰険である。

昼の時間は、府庁の食堂行くもの通常6名、学校の食堂へ行くもの通常8名、四時間目終了と同時にいずこへと消え去る者通常9名、食べさしの弁当を食べるもの通常16名、はじめて弁当を開ける者14名である。府庁通い常習者の話によると、「学校にもどって一組、二組を見ると整然として弁当をたべているのに、三組を見るとその雑然さに唖然とする。」とのことである。

こんなクラスが一年三組であり、担任の稲川先生はいつもため息をついておられるのである。といったってここに書いた特徴らしい特徴はみな男子がかってにふりまいているものであって、女子たる者すこぶるまじめで、きわめて消極的である。この奇妙なコントラストが、三組の真の姿として疑う者はいないのである。

1年4組

吾輩はざぶとんである。名前はまだ無い。（あったらかえっておかしい。）どこで生まれたかとんと見当がつかぬ。なんでも吾輩がはじめて目ざめたのが非常に大きな音を聞いた時であったことだけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中でいちばんどう悪な種族であったそうだ。先に〝見た〟といったがそれはおかしいかもしれぬ。吾輩には非常に重くあたたかいもの、そして異様なにおいが感じられただけであったのだ……。

吾輩、目がさめてからしばらくして吾輩の上に乗っているそのあたたかいものが吾輩の主人であることを知った。なんとなく眠そうな顔をした書生である。それから吾輩は大阪城というものを知った。また吾輩のいる所が大手前とかいう寺小屋の一年四組というものだということも知った。そうして吾輩はいろんなことを見聞きした。吾輩はだからなんでもしっている。こと一年四組にかけてはしらぬことはない。ここの連中がなんでもしゃべるからだ。AとBがどうしたの（吾輩名前をかくようなやぼなまねはしない）CとDはホモ達だの、連中実によくいろんなことをいう。そして実によくなんでも知っている。ただ勉学については責任はもてぬ。クラスには秀才が数人おり並が多数いるのだが吾輩の主人のように授業中いっしょうけんめいお船をこいでいるようなやからが少数いる（少数であるかないか、これにも吾輩は自信をもてぬが）ためである。ただ吾輩がみたところによると連中が目をかがやかせる授業があるにはある。生物の授業、有名なM先生の時である。ああいう話が人間にはおもしろいのだろうか。吾輩にはどうもわからないのだが……

ともかく吾輩は連中といるのが楽しい。見ればみるほどおもしろいのだ。美女が数人（あえて数字は書かぬ）、天才が数人、コメディアンになる素質のある人間が大多数、フォーク歌手志望者、また数人、どういうわけかカップルが1～2組（その過程はよく知らぬが）等々。すばらしい所だと思う。吾輩他の室にいくことはなかなかできぬのだが、ともかく連中よくやる。バカバカしいというか気狂いじみているというか連中は何にでも乗るのだ。自治会祭では音楽キッサなんぞをやって氷とクッキーを無料で食わせた。連中は成功成功と喜んでいたが、吾輩、ただじゃなきゃバカバカしくてこんな所くるわけないと思った。コーラス大会は（吾輩は聞きたくもなかったが）すばらしい出来事だったそうだ。あまりすばらしすぎて学年で最下位ということになってしまったという。もうこれでこりたろうと思うと今度はトンカチやペニヤをもちだしてきた。文化祭で人形劇をやるのだという。連中少し頭がおかしいのではないかと思ったが、止めるわけにもいかないので見守っていた。人形も子道具もてんでばらばらでやっていたが、当日はどういうわけか盛況で人気があったようだ。一。二回白けた舞台があるにはあったが、それでも連中楽しんでやっていた。スポーツにおいては水泳大会が学年二位、そして籠球大会にて女子が相手のゴールにボールをいれるという芸当をやってのけ、真空げり、空手のわざ及びそのすさまじ

がみたところによると連中が目をかがやかせる授業があるにはある。

い形相を駆使して学年優勝をやってのけた。吾輩の見たところそのおかげで男子は女子に頭があがらぬ……。

まあともかく連中かってにやっている。個性のかたまりみたいなのが男25人女20人どういうわけだかわりとうまくやっているし、おかっぱ頭のわが岡先生もガンバッているし、恐いものなしだ。（ただ連中はチャートとかオリジナルとかいうものが恐いらしいが…）吾輩、楽しくてしかたない。おでこ顔の女子バンザイ！　早弁バンザイ！　一年四組バンバンザイ！

1年5組

一九七一年A月B日　午前八時三十一分　我が校本館二階の鶯張りの廊下を忍者のごとく疾走する人影あり、彼こそ我等が一年五組最初の遅刻者x君でありました。彼はハアハア言いながらも恐る恐る教室の戸を開けたとたん「アホ！」と一発彼の頭上に爆弾が投下され、x君がたじろぐのを見ると追打ちをかけるように「一週間掃除！」と二発目が爆発しました。ここで二発の爆弾を投下した高性能小型爆撃機　我等の担任の平正人先生を紹介しておこう。

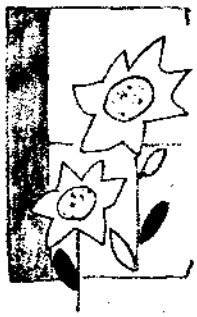
平先生は、前例でもおわかりの通り時間的観念（広くはきまりの観念）に厳しい先生で、この面においても、また野球部顧問として甲子園をめざすファイトの面においても、我が大手前高校の名物先生です。

先生の先制攻撃が成功したのか、それ以後一学期、二学期とも我がクラスは遅刻者なしであったが、三学期になると寒さのせいもあってか、遅刻者が続出し、その責任をとり会長様も一週間掃除をしけ、真空げり、空手のわざ及びそのすさまじ

ている状態である。

次にクラスについてお話ししますと、男子二十六人　女子十九人で、将棋バカ、ビートルズきちがい、大手前のベートーベン、女親分、破壊主義的ニヒリスト　など四十五人がそろって独特な個性を持っています。しかし、ホームルーム教室が御存知、物理教室の二〇一番教室のため、朝っぱらから教科書片手にジプシーの如く教室から教室を転々としているせいか、チームワークはグンバツ！。自治会祭においては、大手前高校全生徒の注目を独占した紙芝居「かぐや姫」、ギターの名手によるギター演奏と観客全員による歌声など、一年生の中では目をみはる大活躍！。校内スポーツ大会においては、気品の良さを決勝戦になると大いに示し、バレーボール、バスケットボール大会では二位となり、万年二位のうわさもチラホラ！　しかしサッカー大会では予想を裏切って、一回戦敗退の憂き目をみたのでありました。

あまり変わったことの起こらない小じんまりした傾向はありましたが、なかなか良いクラスであったと思います。



1年6組

みなさん！（特に新入生諸君）

「インマカモコジゲリンシュロマハ。ガオー」

大手前に入って一年、なんと早いことか。でもお友達がいっぱい、いっぱい。廊下さんも毎朝〝ガタ、ギー、ビシ、バリバリ〟と、欠かさずあいさつをしてくれる。楽しきかな高校生活。しかし筆者は、いまだに、大手前に入ってよかったか、悪くはなかったか、非常に困っているのだが――ン？　どちらにしろ同じ!!

さて、我らが一年六組はどんな風であるか。先生方の間では、もっぱら〝おとなしいクラス〟と好評（？）　○談をいってもほとんど笑わない、授業のしやすく、かつしにくいクラスだそうだ。筆者が思うに、個人的レベルでみたならば我々がおとなしいなど、決して肯定できないことである。ではなぜ、我々は集団となったときおとなしくなくはないのか。原因のひとつは、始めの教室が化学用教室で、二、三年生の授業があるたびに移動しなければならなかったことにある。休み時間は廊下を渡るためにある、といった様子で、なかなか互いにおしゃべりできず、したがって、皮を脱ぐことができなかった。もうひとつの原因は、選択芸術が分かれていたことにある。筆者などは、いっしょに音楽を受ける他のクラスのにぎやかさを、少なからず憎んだものだ。そんなわけだが、普通教室にかわった後半は、急速にクラス内はなごやかになり、サッカー大会で二位という偉業をなしとげ（男子諸君はもちろん、女子諸君の応援もりっぱだったのである）十二月二十三日、他のクラスに先がけて行なわれたクリスマス。パーティーでは、延々八時間、涙（？）と笑いにひたりっぱなしだった。

ここで、我らが六組にとって忘れてはならない存在をも紹介したい。A君―彼は、毎夜タイム。マシンに乗るのである。目をさました時、彼は一時間と数十分未来の世界にいるのであり、もうもとへは戻れない。B君―彼は、硬式野球部の名誉にかけ、また六組の同志のために、Gramの時間に、すばらしい努力を払った人である。その他、C君D君EさんFさん……つまり四十五名、みんな忘られない人たちであった。それからそれから、我らが六組の担任、地学でおなじみの佐野先生にも登場していただきたい。久しぶりの学級担任とかで、先生は非常な熱意とその若い心で、我々のために尽くされた。――もっとも、我々には先生を無視した面も、多分にあったようだが。

ざっとまあ、こんなクラスだったのです。JOURNEY!!

1年7組

我がクラスは、一年の中にあって常に何ごとにつけ、トップのクラスを、アシストしてまいりました。すなわち、勉学においては、常にテールを競い合い、スポーツにおいては、すべて一回戦敗退という、名誉は記録を持っております。

しかし、忘れもしない九月二八日、我がクラスは、体育大会にお

りっぱだったのである）十二月二十三日、他のクラスに先がけて行

しかし、忘れもしない九月二八日、我がクラスは、体育大会にお

いて、校内優勝の栄光に輝いたのであります。優勝旗を中心に、記念写真を取り、全員感激に涙したのでありました。また文化祭においては、アンケートにより大々的に大手前を探り、非常な好評（筆者はこの日学校にいなかったので断言はできないが）を博したのでありました。

あー、どうしてこんな陳腐なものしか、書けないのであろう。筆者はここで、痛切に感じたのであります。（筆者の国語の点から考えて、これが限度という声あり、また頼んだほうが悪いという声もあり。）だが、なにがなんでも、書かなければなりません。あと六〇〇字近くも……。何を書こうか、そうだ、今は授業中、この様子を書こう。

なんと言っても、我がクラスは、とっても静かなのであります。どの授業でも。（ホント）みんなは、何をしてるのであろうか（疑問）。まじめに聞いているのであろうか（反語）。寝ている奴は、一人もいないのであります。そういえば、早弁をする人物もいなかったなー。遅刻も皆無に等しい。掃除もサボらない。とってもよいクラスなのであります。

だが、筆者はここで考えるのであります。高校生として、もう少し道を、はずれてもいいのではないのかと。まちがってもらっては困るが、高校生は、何をやってもよいという、意味ではない。遅刻や掃除のサボは、高校生として、やってはいけないことです。高校生の柵を越えない限り、少しぐらい道を、はずれてもいいということです。少し「クラス紹介」からはずれてしまいましたので、元へ戻してみますと、時は二時四三分、すなわち六時限目。全員（筆者を含めて）真剣に授業を受けております。例によって、まったく静かであり、先生の声だけが響いています。

一年七組の皆さん。こんな支離滅裂な文章を書いてすみません。読んで下さった皆さん、長らくありがとうございました。クラス紹介を、書いてくれと頼んだ人を恨みつつ、筆を置きます。

1　年　8　組

四月八日。入学式。普通の神経の持ち主ならばこの頃は猫をかぶっておとなしくしているものだが、我がクラスはそうではない。持ち前のアホを遺憾なく発揮しバカ騒ぎが続いた。そのため、先は見えていて、いつまでこの学校にいれるかが議論の的となった。

四月二十八日。校外教授（須磨）。他のクラスにしらけたムードがただよっている中、我がクラスのアホの代表四人が車中、町中、山中を問わず大声で歌をどなり、世間に「大手前あり。」と名を高めた。（もっとものっていたのはこの四人だけというのが近年の有力学説である。

五月上中旬。バレーボール大会。この大会で男子九人制で学年二位となり初の賞状を手に入れた。男子六人制では13－0とリードしていながら、日頃温厚で知られている八組健児のことであるから、パーフェクト勝ちはかわいそうだと思ったためか、ついに13－15と逆転負けとなった。

五月下旬。中間テスト。初めてのテストのためか、ほぼ全員が黙々と勉強にうちこんでいて、日頃の姿と比べてみて背筋が冷たくなったのは筆者だけだろうか。それにもかゝわらず成績は学年最下位であり、以後我がクラスは最下位を独走することになる。他のクラスの連中、感謝状の一つでもよこせ。

七月上旬。期末テスト。テスト直前に第一期ヒラショック。

九月上旬。アチーブテスト。この頃、第二期ヒラショック。今回は熱烈なリーダー教信者の日夜絶ゆまぬお祈りの結果、損害軽微。

九月十六日。コーラス大会。この日、歌詞（英語ですぞ）をおぼえていたものゼロ。メロディーをおぼえていたもの若干名。練習のときすべてのパートが合ったことなし。指揮者未定。という好条件のもとで実戦では伴奏と各パートそして指揮者との五輪唱となったが我々の音楽的才能は広く一般の俗人には理解できず、涙をのんでひきさがる。

九月二十八日。体育大会。この日のわがクラスは分裂状態。カメラをもって走りまわるアホ数名。そのあとをついてまわるヌケ作数名。ずっと自分の席にいたホトケサマ若干名。行方不明数知れず。騎馬戦での我がクラスの活躍はすばらしく「なぐる」「ける」は当然のことながら「服を破る」「かみつく」「抱きつく」「ぶらさがる」と独自の戦法を開発し、二、三年を苦しめ、噂をきいて箕面の猿も見学に来るという程であった。

11月12日。HR。恋愛について話しあった。高校生の恋愛とは。失恋したときは。など多くの体験に基づいたこと（？）が飛び出し議論も白熱化して来ていつ終るともわからぬものであった。みんなの顔は真剣そのもの。この話しあいで、我々のクラスの何か目に見えないところで効果があったと思っている。またそれだけではあきたらずその日七時までOMEの地下でねばったグループもあった。

そのあと筆者書き続ける気力なし。

今日一月十九日の学級の状態を紹介しよう。

試験も当分ないためか内職するものは少ない。もっともこれは机の上にその時間の教科書があるというだけで何を考えているかさっぱりわからない。三学期にもなるとダレる教科は完全にダレてしまう。これではダメだと思ってはいるのだが……。

しかし楽しいときもある。今日の生物の実験がそうだ。「ソウリムシ、ソウリムシ、女、ソウリムシ」と叫んでいるものもおれば、このソウリムシがオスかメスか熱心に討論している班もある。

我が八組といっていられるのもあと二ケ月となった。組替えになったらそれっきり、なんていうのはあまりに悲しい。いまからでもおそくない。ガンバルカ！。自分が一年八組の一員であったという誇りを心の片隅に持ってほしい。大手前生という誇りと隣り合わせに。

――――――――

「われ考う、ゆえにわれあり。」　デカルト

「われ反抗す。ゆえにわれあり。」　カミユ

1年9組

まえがき

読者も知るとおり、昭和の始めに修築された、まだ新しい大阪ジロの隣の、これまたボローイ校舎の中で、正門からゲタ箱長屋を通り抜け、三階まで、サイン約四十度の階段を登り、世に言う驚張りの床を北方に十五歩ほど歩いたその右手に、大阪ジロを望めるその教室が、我らが誇る一年九組の教室である。

本文：その一

我が一年九組の同士達で、遅刻常習犯が一人いると思えば、朝早く夜方からひげ、体力、心臓、が走つてやつてくる。そしてノコノコタジヤレで一日を過ごす者、その弟子で野球部ライトがやつてくる。またまた片手に算盤を、もう一方にこづかい帳を持ち「今月は赤字だ。」と言いながら、同じクラブで常に地図に目をこすりつけている者が三、四人である。

暇さえあればギターをジャンジャン鳴らし、奇声を発する者が三名これと同族でネコジャラ市の11人の山チュウの崇拝者が一人、頭の中は常にバスケットで埋っている者が三人、同様ラグビーに凝り生傷が絶えない者が二人、大手前高校の伝統を守ろうと日夜、机の前にしがみつく者三人、　陸上部員二人、必ず選挙に名が出る者一人（筆者ではない）、常に髪をくしでといている者一人、とまあ、見るからに弱々しくて、あどけなく、仮面ライダーのファンが、我が組の男子（うち、筆者と筆者の嫉妬により我が組唯一のカップルを除きました。）である。それに比べ、ボーイッシュ・ガールが数人　しゃべりだしたらとまらない、かしまし娘が三～四人、半日を部室で過ごす地歴部娘、冬はつらい水泳娘、いつも短パンのテニス娘　等々が半分で、これまた、我が校の伝統を守らんとするガードウーマン、国語の超解釈保持者、常に一人で、迷想にふける娘等で、非常にたのもしいかぎりである。

本文…その二

とはいえ、我が一年九組は他のどのクラスよりも連帯感が強く、統括されていると思う。（オセジではない。疑う者は死刑なのだ）

例えば、バレーボール大会は不戦負け、水泳大会、サッカー大会では惜しくも涙を呑んだが、バスケットボール大会では学年優勝、校内二位を占めた。つまり、やれば何でもできる、無敵のクラスなのだヨ、杉作！（駿馬天狗のおじちゃん……。と筆者）

討論会を行い、論争もした。音楽鑑賞もした。映画はまだだ。でも、トランプをした。将棋もした。五目並べもした。百人一首もした。そして、早弁もした。とにかく無限の原子力を秘めた動物園の様なクラスなのである。

あとがき

読者は、これまでの事だけで我がクラスを観念づけてはならない。まだ、ここに忘れてはならないものがあるからだ。それは、何を隠そう。我がクラスの授業態度と「週間井手」である。まず前者についてだが、席が後ろの方である筆者にはその様子が明確にこの眼球に飛びこんでくるのだ。教科別に、頭の上り具合、首の角度、まぶたの間隔、背なかのしなり具合等の差が、はっきりと表われる。これは、やはり大手前生とはいえ、並みの人間であることを表わしているのであろう。筆者は、その光景を見、目を赤くして、自分達の

愚かさを知りつつ、深い安らぎに落ちるのである。

また、本文…その二で述べた連帯感をより強く（なかに弱くするという説もある）する役目を受けている後者の「週間井手」について。これは、筆者が編集長となり、一見バカ、実は気狂いの記者四名の「週刊朝日」や「サンデー毎日」をだし抜こうとする編集部により、極秘に週刊されているかべ雑誌である。

補説

最後に一つ文化祭について述べておきたい。なぜなら、我が九組がこの時とばかりに、「分裂」した時だからである。文化祭出馬に関しては、大手前生独自の三無主義をフルに発揮し、インフルエンザという理由で出馬停止に可決された。しかし、「他競馬の観覧」は誰もが賛成した。（筆者もその例外ではなかった。）そして夜、我が組の男女は念願の「異性とのフォークダンス」を経験したのだった。（ー感銘深いものがあった。ーと筆者）

2年1組

○プロローグ

頃は昭和元禄四十六年、花の卯月の八日のことであります。この奇想天外、破天荒、前代未聞、唯一無二、不世出（この程度しか思いつかないのであります。）とうたわれた天下（あまくだりとちがう）の二年一組の血の歴史の幕が切っておとされたのは……。

○本文

まずは年の順で、担任の先生からでございますが、これがあなたあの後光のさすような（皮肉？）神々しい平口幸男氏、その人なのであります。『さあやってみようね』『ノートをみてもいいんだよ』などの流行語？をつくりだし、また朝は生徒のため我身を犠牲にして遅刻をなさり、先日のスケートでは抜群の運動神経を発揮、見事に自分でころんで自分のメガネでケガをするという偉業を成しとげられたのであります。

さて生徒の方は男が27名女の子が21名の総勢48名。それぞれ個性的人間ぞろいでございまして、良默氏、肌摩氏をはじめとする府庁の食堂を食い荒らす会、裏先氏、那加賀輪氏をはじめとする中国語研究会、骨野氏をはじめとする学生結婚をする会、美気氏、尾奥保氏をはじめとするホモホモ7会等々、学生の本分を見事にふみはずす行動を積み重ね、本日に至っておるのであります。女子のほうはこれまた大手前に二年一組ありといわしめたほどの美女ぞろい（結局、筆者には真実を書く勇気はなかったのです。）で、これら個性的人間が一つにまとまったとき、激しいエネルギーが生まれるのです。あの春のうららのバレーボール大会で男子が優勝したことにそれがよくあらわれているのであります。（何？他の校内大会？紙面のつごうで書けないのだ。すまん。）特筆すべきは前期の会長火災氏をこの組から生みだしたことであります。おかげでみんな自治意識に燃えたって。。。いたかいなあ。話はかわってかの有名な文化祭における我組の活躍は目ざましいものがあったのであります。「現代版リア王」における迫真の名演技で全大手前女性の涙をさそい、感動の拍手がこびりついて今だにきこえるという、根も葉もないウソのようなデタラメがながれているのであります。

さてさてこの組の問題はというと、修学旅行で議論しあったように、どことなく奥の方でのつながりがないってことだったけど、あ

あの後光のさすような（皮肉？）神々しい平口幸男氏、その人なのに、どことなく奥の方でのつながりがないってことだったけど、あの話をしただけでも、すごくまとまった感じだと思うのです。班ノートも出来たしねえ。そう、これからあと2ケ月で素晴らしいことが起こるにちがいないのです。見せてあげたいよ、残念なのであります。

○エピローグ

とにかく、この組は練習の鬼だったのですよ。バスケットからサッカーと息つくひまもなく朝練にはげみ結果はやっぱり・・・。今でも語り草の女子のバスケットの奇跡の大逆転。本当のところ住みやすい組だったのです。尚、登場人物は仮名を使用いたしました。

2年2組

私が今から書く紹介は、今までのスプリングにあった様な面白い物でもなければ、ためになるものでもない。ただ、スプリングの本質に戻るという意味で、我学級を徹底的に、斬ってみようと思う。

一言で言うと、「偽善的生活集団」と呼べる。全てがうまくまとまっているようであって、実は全くまとまっていない。一学期中は討論会を相当数もった訳だが、その効果は全く表われていない。我々は、うまく表面がまとまっていればそれが良い学級であると錯覚を起していたようだ。一日は笑いで開け笑いで閉じた。しかし、絶望感と孤独感にさいなまれていた人間がいかに多かったか。

我々は、熱いもえるような友情に飢えていた。遊ぶことは良くやった。しかし内面的人間追求に欠け、その結果、偽善的生活集団と成り果てた。

自治会祭、文化祭、結果のみを見て判断すれば、実にまとまりの良い、団結した人間の多い学級であったと見られる。過程と発端を見ると、発端においては、文化祭　学級展示の展示項目選定、人道的意見が数人より提出された。それはいいことだということで全員一致でしごく簡単に「精神薄弱児について」に決まった。全員一致で決まったはずの題が中味の薄い物となった。それは我々の他人に頼る心が成した物ではあったが我々自身の「自分の意見をあまり言わない。」という性格から来るものであったことは疑う必要もない。人にうらまれる、きらわれるより人から何も制約を受けないでなんとか妥協して生きたい、その方が負担を感じず生きてゆける。しかし我々はまちがってはいないだろうか。もう一度原点に立ちかえり、自分の意志主張が出来るようになる必要があるのではないだろうか。

この文章を書いている私は文化委員ではない。しめ切り一日前になり、書いてくれと頼まれた。しかし、全く自責の念を表わさない文化委員に対し腹が立った。私は朝5時にこれを書き上げた。

明日はどうなるか判らない。しかし、「偽善的生活集団」である限り、我々の明日は、殺伐とした味けない生活しか送れないだろう。

怠慢により助長された偽善は、その顔につけた面をとらずに死んで行く。

原点に立ちかえろう。

2年3組

祇園精舎の鐘のこゑ、諸行無常のひゞきあり。沙羅双樹の花のいろ、盛者必衰の理をあらはす。奢れる人久しからず。ただ春の夜の夢のごとし。猛き者もつひには亡びぬ。ひとへに風の前の塵に同じ

（平家物語序文。抄）

えーわが二年三組の組員を客観的に見てみると、古来、先の文章にも書かれているとおり、万物流転。業報輪廻　にもかかわらず、いまだ彼らは栄華栄華の行なひをし、道長の「此の世をば我が世とぞ思う望月のかけたることもなしと思へば」という歌の心境であろうと思う。ただし、三年生になればどうかわるかは知らないけれども、さて今度はわが組の授業を受け持っておられるおもだった先生方である。

○現国・古典　朝田嘉蔵氏。「長老」というあだ名の持ち主。文化祭以来、長老によく似たお面はクラスの宝となった。我がクラスの担任で年のワリ（？）には理解がある。尊敬し申し上げる者どもの数、欠点の者の如く、多し。授業におけるチョーク箱いじりは大手前の名物となる。

○数学　小野昭平氏。わが組における小野氏の影響は大変なものである。小野氏は言語学に堪能であるらしく『小野言葉』をおつくりになれり。そのためわが組においては『日本語を守る会』もできたほど。

○リーダー　平口幸男氏。平口氏の英語はぼくにとってはとてもよくわかってたのしい。京阪沿線独特のことばがよく出る。

○物理　最初は桑原啓氏「物理、楽しいでしょ。」楽しくなったと思ったときには、浜田一郎氏「物理、やると頭が光ってくるでしょ」

○化学　岡田忠良氏　希ガスの如く、我々の発する雑音元素（反応力大、一般教師元素と反応し爆発する）の充満する化学教室において状態を変えずタンタンと授業される。一般に無視化学という。

○日本史　小松桑彦氏　小松氏の読書の量は膨大なもののように思われる。組の中には「小松氏をおいとせおいぬけ」とがんばっているのもいるとか。

○倫社　横山典正氏　忍者の如く、授業をなさる。ある者どもは目をつぶり、いびきをかいて睡眠の術の修業する。

○世界史　近藤美都嬢　女性の心理分析の材料として重んじられ、「社会科研究室の花」である。よく、まちがいなさり、即訂正されるさまいとをかし。（をかしを古文の意味にとること）

○コンポ　黒田昌司氏　我々の作った床の落し穴にはまった唯一の人物で、その瞬間、赤面された。それ以来、クラスの英雄となる。

さて四月から今まで組においては楽しいことも悲しいこともおおくあったように思う。そして、今、まさに、三組は「人間には炎の時と灰の時があるという。」と、いわれているように、天地を焦がす炎の時である。さて以上、組の紹介をして見たのだが、しかし本当の事を知ってもらうためにはやはり三組の中にはいってきてもらって一緒に生活してもらわなければわかってもらえないとおもう。けれども、この文章を読んでもらって多少なりとも三組のことをわかってもらえたのなら筆者としてこれ以上のことはない。最後に、朝田先生と四十七名の生徒諸君がいつまでも炎の時であることをい

くわかってたのしい。京阪沿線独特のことばがよく出る。

朝田先生と四十七名の生徒諸君がいつまでも炎の時であることをい

のってやまない。

（設問）

一、右の文章を参考にして、古来「三組がよい」と言われているわけを考えてみよう。

2　年　4　組

汝、二年四組を知りたまふや。文化祭を思い出してくだされ。運動場で数個の瓜らしき物体を上げるために、必死で走っていた連中がいたでアリマセウ。あれが二年四組であります。あの時は校内の「嘲笑の目」を一手に引き受け、他のクラスの展示を悲しみの底から救いました。でもネ、上がったんですよ。2つだけれど。残り？彼らは偉大にも重力のあることを示し、そして引力の存在までも証明したのであります。ナオ、これには物理の先生方の御指導を仰ぎました。（それで失敗した？）このように我がクラスは、一見冷静を装いつつヒタスラ目立つことに全力をかたむけました。自治会祭では「お化け屋敷」をやり、アンマリエゲツナイので化粧を少し落としたにもかかわらず一年の女の子に泣かれ、バレーボールでは男女なかよく優勝をなしとげました。

水泳大会では女子の大根（或は足）を男子が引張りましたが、体育祭では陸上部四人が抜けたにもかかわらず、紫のハチマキ、大応援旗をうちふり、二位になる大奮闘。オシカッタ!! 運動ばかりではありません。コーラス大会では、各人ヒタスラ声を張り上げたのがたたってか六部合唱となり、三位！ 文化祭の演劇部の劇には、激しいオーディションの末、当場人物五人の内四人を送り出し、惜しくも出れなかった者は後援会を結成し、スゴイ声援（ヤジ？）をおくりました。しかし、その後の活躍はモッパラ女子に任されました。圧倒的な強さでバスケットに校内優勝したのであります。男子はバスケットに大敗し、サッカーにおいては、ボールがゴールキーパーをよけて通ったため、女子の試合を観戦し、公平に敵味方両方をヤジリ、試合後、ホーッとため息をもらしたのでありました。

そして、これらの間には素晴らしい修学旅行がありました。しかし、アノ伝説的な修学旅行の「愛のめばえ」はほとんど無く、夜は麻雀、ナポレオン、ウスノロ、衝撃の告白で明し、昼は、睡眠不足を補うためにバスの中でネテオリマシタ。また、女子のミナサンは、夜、フトンの中で泣いておられたそうであります。（泣いた女がばかなのか、泣かした男がばかなのか）　でも、四泊五日、いっしょに暮したこと、いっしょに寝たこと（ナニではない）、色々話をしたことで、何かミンナの心が通じ合ったと思います。何か心の奥でつながったような気がします。なお、現在、秘かに第二次修学旅行を計画しつつあります。

ところで、大手前で無くてはナラヌ学問ですけれど、ミナサンとても真面目で、わからなければドンドン質問し、一時は、二ノ四の質問の膨大さ、シッコサは先生方の職業意識を目ざめさせ、職員室でも話題になりました。そして、ただただ勉学にいそしみ、平均点をコヨナク愛しました。ただ一つ、不幸なことには、ミンナあまりにも試験運が悪すぎたのであります。

二年四組の一年はこのようなものでありました。その間、各人それぞれの個性を最大限に発揮し、マトマッテいないようでマトマリマトマッテいるようでマトマッテいない我らがクラスでした。「寒いムイ！」と叫びつつ、広瀬先生のレベルまで下げたダジャレを言い、四無主義（御存じ、無気力、無責任、無関心、無参加）を豪語しながら、あの東海林太郎、渡辺はま子先生をはじめとする諸先生方のナツカシのメロディーを歌い、チャンバラ。トリオを愛した私達でありました。ここはささやかな場所だ。そして今、私はこのクラスを、友人達を、恋人（公的文書に私情をはさむな！）を愛する。

2年5組

―― プロローグ ――

欠点全校一（課目数・人数とも）の組
ゴロー先生の組
かの有名な美女（非女）の組
もうあのそのいやほんまにもうこれはエゲツナイドッセ
職員会議でも話題のクラス
いちはやく「ハタ」をつくって事あるごとにふりまわした組

―― 第一場　それ以前 ――

大あたりだった自治会祭の「迷路」
悪ノリのきっかけをつくった学級日誌
五くみの実力をまざまざと見せつけた何回かの定期テスト
応援だけ賞をもらった体育祭
一夜づけにしてはよくやった国定忠治

―― 第二場　そのとき ――

深夜に窓をあけておたけびをあげたヒト
男子の部屋で寝たオンナの子
女子の部屋で徹夜したオトコの子
三脚持って走りまわったカメラきちがい
とうとうナポレオンをおぼえてしまった五組に数少ないまじめなスーパーマン
チンイーソードラチリーチをやった鉄工所のむすこ
反省のH・Rのときに次々に明るみに出る新事実に青くなった担任の先生

―― 第三場　それ以後 ――

バスケット大会男子優勝
班ノートの活動開始
コーラス大会予選第二位（そのあとはシラン）
サッカー前日の四時間の練習でバテた
クリスマスパーティにえんえん三十分も劇をやらかしたオナゴ四人
ついに欠点全校一

―― エピローグ ――

いいのは担任の先生くらいとまでいわれた

我がクラスは、そのものズバリ「悪のり」なのであります。必然的におべんきょうの方はサイテイ線をいったのであります。そやけど正直に言って、ほんとうに楽しかったのであります。（実にいろいろな意味で）

追伸　オレにこんなん書かせたんがそもそものマチガイやなかろうか？

2年6組

「ネエ、寒くない？」「寒ないわ、アホ！」

優しさと純情、無知と追試、オプティミズムとペシミズム…それらが互いに入り交じり、わめき、衝突し、転げまわっている集合体が六組なのである。屈曲することのない理性と直しようのない表皮と奇想天外な個性ーいかにも六組はそういう集合なのである！

ホンでナ、普通ならここで、球技大会や文化祭の自慢をたらたらと述べるわけであるが、残念ながら六組には、一枚の賞状も、一個のトロフィーもない。しかし、ここでさっぱりとやめてしまったのでは、クラスのみんなに申し訳がたたないけど、何も私が好きでこの紹介を書いているわけではないので別にいいのだが、やっぱし書かんと悪いから書く。

唯一の活躍はコーラス大会である。

出ない声を無理にひきずり出し、朝から晩まで「丘をこえて」じゃない「涙をこえて」。「オマエらもっと悪ノリせえ！わめけ、踊れ」という女子のメンメンの要求に対し「そんなんいややん。ウチら、ようせんシ…」という男性諸子がかみ合わず、ずい分モメたのだが当日はトランペットあり、ギターあり、タンバリンありの大世帯で、青少年会館の舞台からあやうく転げ落ちそうになりながら、第四位という輝かしい栄光を手に入れることができたのである。

運動はパッとしなかったが、遅刻の数とクラスノートの普及率は絶対ひけを取らない。特に後者は三十冊近くのノートが消費されたといわれている。現在はやや下火であるが、その代わりに「試験に出る英単語」というお経の本が爆発的に出回り始め、たちまち六組のベストセラーとなった。その他、一部の者の間に「大学への数学」という畏わしい本が広まっている。

個人的には、何事につけても卓越しておられる方が多々いらっしゃる。数学にしてもしかり、ロックにしてもまたしかり、書道、クラシック、水泳、バレーボール△○※　ワン！　ウワサのカップルにしても、あるようでなくやってないようでやっている。修学旅行での一部の者のいじらしい努力の成果であろうか。欠点といえば、時々シラケ鳥が飛んでくることと、討論会がムチャクチャなこと。一時間かけても、結局何をやったかわからないといった討論が非常に多い。個性が強いのだ、要するに。「遊ぼうや！」「ナゼ？」何となく冷え冷えとした風が、クラスを吹きぬけることもある。みんなの顔が悲しく見える。

しかし、六組の姿はとても一言では表現できないのだ。シラケただけでなく、おもしろいばかりでもない。趣きがあるのだ。えもいわれぬ魅力があるのである。

狼のように雄々しい女のコと小鳥のように愛くるしい男のコ（あっまちがえた）　うん、それが六組なのでした。

2年7組

二一七に於ける二大事業の一つは、文化祭出品作品、劇「釈迦伝」である。これは文化祭に於いて大好評を博し、最優秀賞を授賞した。偉大な努力の結晶であった。これは、我がクラスには〝美女〟なんかいもしないのに五人も仕立て上げ、言うまでもなく厚化粧した甲斐あってか、衣装がよかったと、もっぱらの評判であったことからも分る。もろもろの者全てが、頑張った。そして努力は実った。劇が終わって後の暫くの間なぞは、拍手が鳴り止まず、アンコールを求める声で会場は満ち満ちていて、耳ざわりに感じる程であった。また、出場者は外へも出られず、幾重にも取り巻いた人垣をよじ登り、ついには負傷者まで出る始末。こうして、汗と涙と埃の合作の劇「釈迦伝」は、大盛響のうちに終わったのである。この劇の製作によって、現在にまで至る2-7としての連帯感が生まれたのであるが、もう一つ重大なる副産物が生じた事を書き落とす事はできない。それは、みな適度のアホとドジ、或いは過度であるかも知れないが、になってしまったことである。もっとも各々は、自分はそうじゃないと思い込んでいるのだが、中には文化祭以来、〝ドジ〟という〝枕詞〟を付けられた者もいるくらいなのである。この二つの要素は、今なお全員の心の中に深く刻まれている様である。

さて、今一つの大事業は、班ノートの作成である。この内容は、詩、小説、作詩、作曲、随筆、評論を初め、個々の内面的な事まであらゆる分野に至っており、我クラスの個性の豊かさを誇示しているのである。もっとも程度は高くない。早い話が低い。みな最初こそ真面目な事を書いていたが、二回目となると本性が現われ、三回目には羞恥心が姿を消し、しだいに乱れていった。しかし、班ノートは皆に安らぎを与えた様であった。なぜなら、他人の書いている事を見て、ユーモアの豊かさに驚くものの、次の瞬間、これはユーモアよりも羞恥心のなさ、つまりドジの領分に属するものだと思うからである。そして、次に優越感を感じるからである。そして次に自分のドジを思い出し、他人もたいした事はない、自分と同程度だと、勝手に決め込んでしまうからである。

この様なクラスであるから、勉強も今少しだめだった。（全くだめだったという噂も流れている。）このだめな所に一層拍車をかけたのが班ノートだった。班ノートが回ってくると、それに時間を取られて、勉強ができなくなるからである。しかし、平静でも、やっているとは言えないのだから、班ノートを口実にしている可能性大である。班ノートの形式も、いろいろな物が現われた。ある班ではカラフル運動、パノラマ運動 ー 班ノート立体化運動 ー が起こった。

ところで、我クラスに於ける流行の変遷も見逃せない。

四月、ある男子が世間の流行に先がけて、恥らいもなく「毎度おさわがせ致します。……。」と大きな声でふれ回る。

十月、文化祭のテーマソングに非常に興味と熱意をもって取りくんだ者が出て、文化祭の終わった後も、周囲の者いろいろと悩まされる。修学旅行の終わって暫くの後も続く。修学旅行では、〝ガッツ〟と〝ファンのみなさん〟という言葉がヒット。後、〝ガッツ〟

と親指を立てる運動が結びつき、空前の大流行。その後、自分の生み出した言葉をはやらそうと皆必死。特派員まで作って頑張る。

十一月、既存の〝すぎの子会〟に対し〝グループすみれ〟が誕生し、張り合う。他のクラスにまで勢力を拡げる。しかしその後、双方解散。

言い忘れたが、修学旅行では、各人に〝枕詞〟がつけられた。元々男子が言い出し、女子には内緒にしていたのが、しだいに暴露されたが、〝枕詞〟の中には、かなり……な物もあったが、それは人権擁護の立場から秘密は死守された。また、○×週間という運動が持ち上がった。これは、その週間の間、授業中、○×氏を積極的に先生にあててもらう運動であったが、数名がこの運動の犠牲となった。いろいろ問題はあるにせよ、楽しく過ごせた一年間であった。

2年8組

ぱっと顔を合わせたのは四月だった。男をそろえた（よりすぐった！）って感じのクラスだったね。そして、女の子たちは、みなおとなしい（ギャッ！）。男がいい、いいと言われたって文句も言わないんだから、やっぱりおとなしいのかな。

そして段々と調子がでてきて、二学期へ入ったんだ。

水泳大会は惜しかったね。デン部（H・Pともいう）に名誉の負傷を負った仲間の欠場は、とても残念だった。でも、彼、体育大会でがんばったってね。なんてったって三位だから。

そして、波乱にとんだというか、ハチの巣をつついたようだというか（とんな目茶苦茶な比喩は忘れていただきたい10ヘンリー）、そんな感じで文化祭がやってきたんだ。まあ、あの時のはり切りようというか、悪乗りしたというか、めったに見られたもんじゃなかった。この薄よごれた、掃除のゆきとどいた教室を茶室と日本庭園に改造するなんて決まったときは、いったい誰が、できるなんて思ったろうか。

それが、一部ののりすぎたグループによって、手製のししおどし（「しかおどし」でもいいんだヨ）は造られる、大阪城公園から大量に庭土がかっぱらわれてくる（内緒だよ！）といったふうになったんだ。そして、気がついたときは、万博の日本庭園も見おとりするような、一大傑作が誕生していたんだ。これには、和服姿の美人を見ながら茶菓子を食べ（どっちが目当てだ？）、そして、琴の演奏まで聞けるという大サービスもあって、相当うけたことまちがいないんだから。（自信過剰というなよ！）

このころから古典派が隆盛になったんだ。この古典派の大臣たちっていうのは、「優雅」とか「みやび」という風情を学校にもちこんできたので、相当みんなと衝突があったんだけど、（なにしろ「ちょうちょ」が「てふてふ」、それに「君が代」とくるんだから）ところが、姫の出現でそれも緩和されてきて、いつのまにか仲良くなっちゃったんだ（国博士が言うんだから、まちがいない。）

それから、例の「カラス」についても書かなくちゃいけない。このカラスっていうのが相当にやっかいな代物だった。クリスマスパーティにまで飛びだすんだから、もう、マイッタ。何日もかけて練習した合唱曲「七つの子」なんだけど、文化祭のファイアーストームで歌いだし、みんなろうそくをもって集まってきて（ロマンチック！）そして、吹き消し合いをやった。（アーアー）けれど五位（

無念！）。

この文化祭の二日目あたりからなんだ。どういったらいいのか、このクラスの男の子の実力が発揮されだしたのは。雨後のタケノコみたいに、カップルができたんだ（いや、できていたが正しい）。

そして、そのペースを維持して修学旅行へ。修学旅行については ここで書くよりは、文集を読んでもらった方がはやい気がする（教卓の中に、いくらか余ってるヨ）。なにしろ目を開けて眠るオノコ、あの子にあってから、狂ったようにCMソングの替え歌を歌い続けたオノコ（あれで「きままなジーナ」がヒットした）、昔は男もでたと片肌脱いでリキんだオノコ、そして所かまわず眠りにおちいった雀士たち。それから、女の子についても、お風呂のエピソードなんかがあるんだけど、適齢期で支障になったりするとこまるから割愛します。

けれど、一番よかったのは、みんなと夜を徹して話せたこと（赤裸々な告白ってやつだ）そして、反面いいようのない寂しさ、旅の哀れなんてやつをホロリと感じたことなんだ。楽しさが感きわまれりって感じだった。

こう書いてくると、一つも勉強してないんじゃないかって気がするけど、これはこのクラスがよくガンバルってことからくる余裕みたいなもんだって気がするんだ。

それから、これはつけたしだけど、「年期が入る」ってことは大へんなことだという気がする。いつのまにか、四十何人の人間と、まあ肩たたき合ってやっていけるムードになってるし、それに、あの担任の伏見先生にしたってそうだ。「全国のパパ諸君、伏見敬治でコンニチワ」なんてなったり、「さすが先生」なんて雰囲気になったりするんだから。（クリスマスパーティの出資者だもんな。）

2年9組

浅野先生紹介の「中国烈女伝」という本にちなんで「二ノ九烈男女伝」を書くとしたらまず上がるのはF君だ。彼の繊細な神経、人の心まで見抜くその厳しい目。何かひかれる男だ。

次はKさん。美しい女性である。日本の女性は一般的に美しいと女性週刊誌に書いてあった。「女性が化粧して和服を着てほほえむときすべての物体は無である。たゞそのほほえみの中にのみすべてがある。」という言葉がある（？）そうだが要するに女性が美しいかどうかは問題ではなくそのほほえみの中に美を超えた女性の良さがある。

今「PB」を読んでいるK。彼には負ける。頭のいいくせして興奮して純情でかわいい。きっとこわい女に手ごめされるタイプだ。

次にO。笑わせるのに努力しているだけ、人が笑わなくなると彼の生命も終る。だが皆が笑わなくなるはずはないのだ。

Hは人間的すぎるのだ。芥川の文章に「人間的、たいへん人間的な人物はまったたしかに大へん動物的である。」人間と動物と何がちがうのか？　ニュアンスのちがいさ。

Sさん。感じがいい。やはり二の九はこれだ。なぜ石川さんはSさんのようなすぐれた人材をほっておいてあてないようにするのか。それが不思議だ。あいらしい心臓、美しい盲腸、卓越した肺、なんと美しいのだろう。（他の人は「あいらしい目」と書くだろうが）

二ノ九の他のものにも書くことは山ほどあるが、限りがない。あ

でコンニチワ」なんてなったり、「さすが先生」なんて雰囲気にな

とは省略。今ホームルームでクラスのことについて大討論中。（これは五時半まで続いた。）これも書きたいが省略。

ぼくの十六才の青春を一瞬に燃やしたクラスだ。おれの青春はすべて二ノ九にかかっていたのかも知れない。俺の青春とは、それが二ノ九といえる。美し青春！　十七才くらいの女の子がニコッとはえんでくれるようなこと。それを求めるのが青春。

しかし二ノ九は修学旅行がすぎてから面白くなくなったようだ。一学期の自治会祭でのデタラメな劇をデッチあげた頃が最高か。

3年1組

毎日始業時刻やその他の学校の時間的規制には目もくれずに学校に来ている大胆不敵な連中の集合体それが一組である。換言すればいかにしてこの受験難時代を要領よくかつ効果的にすごすかを日夜追求する集団それが一組である。受験の弊害を象徴するクラスだ。

ある先生曰く「このクラスの出席簿はきたないな。あまり良い傾向とは云えないよ。」今日現在の出席状況は欠席十一名。出席者の大半はどの授業でも自らの躍進（？）のため先生の声をノイズとして日夜はげんでいる。そのため多くの先生は常に嫌味なまた正しい警告をされる。もし三年一組の合格率が高かったならば先生方に対して大へん良いまたは悪い教訓となることだろう。

ここで筆者は強調したい。一組は受験にもっとも迎合し打算的に要領よくふるまうことによって受験のもつその（　）しい実態をさらけ出し後世に何かを問わんとしているクラスでもある。そういう歴史的使命（？）をもつクラスなのである。

二ノ九の他のものにも書くことは山ほどあるが、限りがない。あ

三月二十日にこのクラスの意義が判然とする。乞御期待。

次の文はクラスの一員の感想です。

アリさんがせっせと働いています。よく働きます。たったひとりで何もしゃべらずに。アリさんは将来生きていくために働いています。そのために今はガマンして働いているのです。

アリさんは、ほんとは働きたくないのです。やりたいことをしたいのです。信じているのです。いつかきっとできる日が来るのを。自由な時間がもてることを。

でもアリさんは知っています。一生懸命に働いてもただむなしさだけが残ることを。働いてさえいれば死なずに生きていける、みんなと同じように暮らせるのです。そしてアリさんはみんなから離れるのが怖いのです。

ところが一方では自分は一人だという意識をもちたいのです。だけど今はそんな勇気はないのです。

アリさんはよく働きます。そのアリさんが今勇気をもとうとしているのです。

3年2組

「自治会本部は無責任だと思います。我々の意見は全く無視されています。以下云々。」A君、偽善的、理想的意見を披露。単純な女子数名、感激して聞きいる。ここでB君やおら起立して早口に、独断的、非現実的意見発表。教室はしばらくザワザワ。そこでC君、パッと立ちあがり、ハキハキと折衷案提出。拍手パラパラ。一部からはやや非難のまなざしを受ける。つづいて、女子代表D嬢意見をいいはじめる。初めは冷静、徐々に顔面紅潮、中ほどでは自分の話し方、意見に酔いはじめ、おわりの方では、興奮して自分も、他人も何を言っているのかわからない。

E君、のっそりと立ちあがり、「こんなこと話し合うのやめましょ。面倒くさい。」と逃避的、無気力な意見。いっせいに非難と軽蔑の視線が集中。このころになると教室には、白いてふてふが飛びかいはじめる。議長は収拾がつかず、教卓でしどろもどろ。ヤケッパチになり、だまってすわっている人を指名。「Fさん何か意見ありませんか。」 F嬢は顔を真赤にしてうつむいて、モジモジ。しばらくして「何も意見ありません。」 議長ガックリきて、心の中で「オンドリャー、さっきから何聞いとったんじゃ。」と思いながらも、うわべは冷静を装う。このころになると、白いてふてふたちで黒板のあたりは真白。しばらくの沈黙を破って、G嬢立ちあがり、表情豊かに、手振りを加え、大きな声でペラペラペラ……男子一同、あまりよくしゃべるので、ただポカンと聞きいる。結局しゃべり方に感心して、内容は聞きのがす。あとはまた沈黙が広がる。H君は初めからずっと、わき目もふらず英語の勉強。この時分には、おしよせた白いてふてふがまき散らす鱗粉で、全員首までうまり、ただもがくだけ。

一学期の前半の三年二組は、いつもこんな話し合いが続いた。話し合いに精力を使いすぎたために、球技大会、水泳大会は全くダメ。体育大会のみ、一部女子の活躍で面目を保つ。とにかく、前半パチパチ、なかばチョロチョロ、後半メロメロという感じ。

師走の風が、冷たく我々の心を吹きぬけるとき、我々を大いに刺激したのは、担任荒井先生の衝撃の告白。12月17日午前10時40分ごろ。突然荒井先生自ら、「担任は明日結婚します。」クラス全員一瞬キョトン。やや間をおいて、「ウワァー」「ヤッター」「イヤラシー」「オレにもくでー」などの声。とにかく、オメデトサン。男子一同「やっぱり、顔じゃないよ、心だよ」と安堵の溜め息。

なんやらかんやら書いてきたけれど、結局は、三年二組は、ごく大手前的な、平凡なクラス。特に良い印象も、悪い印象もなし。まあ、みんな元気で楽しく暮らしましょう。それでは、みなさん、また逢う日まで。

3年3組

◇プロローグ

某日、突然「クラス紹介たのむ」の声を浴びせられガク然としてその場に立ちすくむのでありました。ムム……むつかしい！……え！ 締切りは今日？……ゲゲ！ というわけで、現在授業中に睡眠不足の眼をこすりながらこの文章をつくり上げております。

男子一同　あまりよくしゃべるので、ただボカンと聞きいる。結局しゃべり方に感心して、内容は聞きのがす。あとはまた沈黙が広がえ！　締切りは今日？……ゲゲ！　というわけで、現在授業中に睡眠不足の眼をこすりながらこの文章をつくり上げております。

だいたい一人に四十数人の群がるクラスの紹介を押しつけるのは不合理なのだ。

◇分類

理想主義者。政治屋。マージャン屋。勉強家（何の？）。遊び人（プレーボーイにあらず、ボーリングビリヤード早朝割引でチコク組）。偽善者（本人は映倫のつもり）。ウソウムソウ。紀比呂子のファン。YM近畿志望者多数。

◇考察

①たしかに三ノ三は良いクラスだ。何でもやりた屋とつぶし屋とがうまくつりあって微妙なバランスがとれていた。これは政治屋の権謀術策のおかげだろうか？

②理論のクラスであった。ロングホームルームの時間は波らん万丈最後にはアビキョウカンとなるが死人ケガ人のないのはあたり前。皆が理論を重んじ腕力に訴えなかったから。同和の時間は議論白熱して時間不足となっていた。

③俗説によると三の三は「大手前の屋台骨、いやつっかい棒」であるとのこと。

④まとまりのないクラスであった。筆者はこのクラスにいて「君どこのクミから来てるの、よく見かけるねー。」などといわれた。

⑤偉大なクラスよ。見よ！　かの偉大な功績を！　変動座席制を！（新入生の諸君よ。ぜひ我々のあとをついで変動座席制を行ない大手前に「座席の自由」の灯をもやし続けてほしい。）

◇変動座席制の実態。

朝の八時十五分。教室には一人もなく、彼方から0君の足音がきこえる。彼は全く毎日早い。ゆうゆうと後の黒板にかかっている自分の葉書大の名札をとり、スペシャルデラックス席の一番後の隅をとります。0君に負けじと数人が足早に来て先を争って名札をとりヨコ一米タテ一・五米の座席板にかけます。八時三十分には約半数がほぼ後の方の席が埋められます。三十四分、担任の須崎先生の前を歩く十数人の集団が後ろの席をとろうとして殺到するがグリーン座席は満員で一般席であきらめます。先生はおもむろに出席簿を開き後黒板に残った名札をしらべます。変動座席制は先生の労力を軽減しており日教組スイセン（？）となっているとか。三十九分に2君が走りこみますが空席は教卓前のサジキ席だけ、彼観念してその席をとることになります。彼は先生から何か注意をうけます。この制度はチコク常習者にはカコクなものです。

◇以上のような文章で三年三組のようすがわかるでしょうか。三ノ三も他のクラスと同じようにかなり奇人怪人が揃っており、それなりに矛盾し調和し、男女比三対一という異常な状態でも女の子のとりあいも少なく（容姿の問題関連ある？）とにかく何となくまとまって居心地の良いクラスであることがわかってもらえれば満足である。

「人間はかれが愛するものによって
たやすくだまされる。」

モリエール

3年4組

我クラスの雰囲気は、非常に華やいだというべきか、自暴自棄というべきか、とにかく全く重苦しさとは無縁である。ただ、この調和を破る者も何人かいる。例えばW君。彼のモーレツ振りにはあきれ果てる。家では寝ることはおろか、おシッコに行くこともせず勉学に励んでおられるとか。常に社会科系統の問題集を携えている。これはもう、かなり薄汚れ、数十回は繰り返し読まれたものと思われる。今や、彼は三ノ四の神話だ。第一時限が終わると食堂へ飛んで行く習性は有名で、食堂のオッチャンも「初モンはW君に」と決めているとかいないとか。とにかく彼のバイタリティーはすごい。それに刺激されたわけでもあるまいが、四組は運動面では相当の活力を程した。男子はサッカー、女子はバスケット大会でそれぞれ学年優勝している。

それは大変結構なことではあるが、悪い所もある。大清掃統帥司令官松田教諭や、同目付役Be氏が度々清掃を促すにもかかわらず教室及び分担区域の階段には、こんもりと、まことにエレガント(?)に塵埃が層を成しているのである。

我三ノ四を一口で形容するとすれば、雷雲に飛び込んだ小形飛行機というところだろう。今にも空中分解しそうで、なかなか分解しない。構成人員を見てみよう。紅衛兵日本出張兵のT氏。彼は毛語録を読破した。また、高橋和巳以外の作家は庄司薫を除いて認めぬようなY氏。彼には、何とかして萩原朔太郎の価値を認めさせねばならない。一転して、賞品目当てにをちこちの受験雑誌に応募するI氏。実際に賞品を獲得するからニクイ。更に先のW、Be両氏が続く。奇行癖では、K嬢とS嬢。伏見稲荷をこよなく愛し、足繁く通っておられる。K嬢のクシャミは小生のそれとは正反対で、まことに可愛らしいとの定評がある。またI氏は小説をものし、O社の松下幸之助賞を獲得した。

小生は――と言えば、一月の後半にもなって、尚落ち着きはらってこんな駄文を書いている。これで一ノ九、二ノ一そして三ノ四と三年連続でクラス紹介を執筆したということにのみ喜びを感じている。大学入試なんぞど吹く風。知らぬ人がこれを読んだら、よほど世俗を超越した人と小生を評価するかもしれないが、どっちかというと超越ではなく没落といった方が適当であろう。でも、この三年間、小生は周囲を常に励まし続けてきた。僕は別にどうということも喋らないのだが、誰もが小生を見るだけで「頑張るぞ」と意を引き締めてきたに違いない。彼らは小生に、感謝の意を表してしかるべきだ。

ニクソンショックによる不景気の風。三ノ四諸君が世に出る頃にはどうなっていることやら。小生、きっと物乞いをして回ることになるので、世の中が不景気では大層困る。

「入れ物がない。手で受ける」でもいいから皆さん、どうぞ慈悲を忘れぬように、オネガイ申し上げる。

ならない。一転して、賞品目当てにをちこちの受験雑誌に応募する

3年5組

クラス紹介の時間がやってきましたネ。わたしたちのクラス三年五組を一言で言うことはできませんね。少なくともつい最近まではそう思っていましたね。でも吾輩は猫である。いや悟ったのであります。それは「不調和の調和」であったのです。そしてこの大原則が静かにしかもたくましく燃え続けていたのでありんす。最初から大きな「運命」を背負って出発したのです。それは理科系クラスだということで女性が十人に満たないこと。しかもそのメンバーたるや…えげつなー（ゴメン）だったのです。それにひきかえ男性の方は、にしきのあきらめ、マークレタスー、野口五浪などと自負する者多数でした。ここに「不調和」があった。そしてこの「不調和」は各行事で非惨にも着実に現われたんです。クラスマッチと名のつくものすべての一回戦敗退、体育祭での全校ワーストる、各行事参加への徹底した消極性ぶり。こんなクラスでしたが、一つの明るい材料（頭のせい）は担任の鈴木朗夫先生の暖かい笑顔（名前の通り）でした。先生は授業においても多くの名文句を残されました。それは「たで食う虫も好き好き。」「それでいいんじゃないの。」などでした。そしてこのようなすばらしい先生にめぐり会えたのは、三年五組の唯一の特権だと思うんでがす。冗談はきておいて、この「不調和」の我がクラスにも男女間に「調和」を見出したものが、二、三あったようです。しかし所詮は、「不調和」の運命をになったクラスでは男女交際は空虚なものにしか見えず、かえって男々交際や女々交際がもてはやされ、なかにはいきすぎ（？）を生じた感もないではナイジェリア、アルジェリア。しかしこの「不調和」も最近では完成期に近づいているようです。授業中は教室じゅうに白いてふてふが飛びまわり、内職花ざかり、しかも座席は満席（欠席が少ないのが我がクラスの特長）といった具合なのです。始業開始一〇分後に登校するのを日課にしてしまった人がいたり、化学教室での三十八度線（この線を境にして好学士と好談士が対立している）など、今では「調和」さえ見出している。そして今や私たちクラスメートは「不調和の調和」の完成をなさんが為に毎夜勉学にいそしみながら深夜放送に聞き入るのであります。「夜光虫」なのです。そして敵は大学なのです。すなわち大学への「調和」と予備校への「不調和」を目指しているのです。

それでは皆さん、このすばらしい大手前の伝統を守りつつ、新しい何かを創り出すように、「バラ色」の高校生活をおくってください。それではサヨナラ、サヨナラ、サヨナラ…。

3年6組

三年六組、担任、岡田忠良先生、女子三十二名、男子十六名。クラスの雰囲気を一口で言うならクラス紹介の文を書いてくれる人と言っても、誰もふり向いてもくれないという感じ。しかしこれは三年生ならばしかたのないことかも……。このクラス、三年生になったとたんから、その顔ぶれの多彩なこと、ユニークなことその性etc.で非常な興味を持たれておりました。そして岡田組の名に恥じず、その遅刻欠席の多さで有名でありました。寛大なる岡田先生には、そのために職員室などでずいぶん肩身のせまい思いをなさ

ったのではないかとつくづく御同情申し上げる次第です。また一日のうちで授業により出席者数が著しく異なるということでも大手前で一、二を競うのではないでしょうか。

えー、ここで筆者が変わります。

この組については数々のことが思いあたる。まず第一に女子が幅をきかしている。一部を除いて掃除日直まるでダメ。欠課早退遅刻休日はザラ（これは男子も）。掃除などは思いついた時有志がする状態。なんと情けないというか、はしたないというか、可愛いらしいというか。こんな女子を嫁さんにすると一生苦労しますり、男子諸君。入試があるので、無関心、無責任派が多いが、これはどこの組でも同じであろう。これは学校と社会の進学主義の所産である。それでも一部の人は熱心にホームルーム活動をしていたのは喜ばしいことであった。

とうして一年間過したが、概して印象は少ない組であった。しかし文化祭体育諸大会自治会祭等で若い血を燃やした人も多かった。欠席が多くて先生方の御立腹を招いたが、これもいい思い出になる日が来るかも知れない。まあ、普通のクラスであった。

3　年　7　組

ありきたりのクラス紹介はおもしろくない。わがクラスの雰囲気を趣向をこらして七五調で表現してみよう。

サインコサイン　タンジェント　　微分積分　数列と
いくらやってもかなわない　かなわない

ガウスーガロアに　かなわない
寺田、田島に　勝浦と　　おっと忘れてた　佐藤忠（ちゅう）
皆様おなじみ　ラジ講の　　受験指導の　権威さん

昔の女（ひと）の失恋が　　今じゃ、我等が教材よ
もしこのぼくが恋したら　　後（のち）の生徒の教材か
係結びは　そなむやか　　季絶杜律に悩まされ
光源氏が遊びぶり　いとをかしとは　いとおかし

我等が救い　森一郎　　単語が売れたら文法と
次々出すは　いいけれど　　それだけやれる暇がない
知る人ぞ知る　豆単の　　最初の赤字がアバンタン
これじゃ　やる気が　なくなるぜ　　赤尾先生　考えて！

水兵リーベ　僕の船　　あてにするなよ　借金を
スコップで掘った同素体　　我等が敵は　アボガドロ
球を投げては　ところがして　　ノーストライクは物理学
ボールばかりは　球にきず　　わけを教えて　竹内さん

去年の話題　大久保と　　どこかにもいる　西郷と
家茂清隆　プチャーチン　　ああ楽しい哉　日本史よ
平氏の子孫　ワットタイラ　　薬会社か　ブラッシー
何か変だなチョトマテクダサイ　　これこそ我等が世界史じゃ

最後　リズムが乱れたがお許し願いたい。

いくらやってもかなわない　かなわない

最後　リズムが乱れたがお許し願いたい。

3年8組

男一八人、女三〇人。これが三年八組のメンバーだ。一年、二年に比べて男女の比がひっくり返った。しかし、この位の方が男女の勢力関係はちょうどいいと思う。（美しいものは多い方がよいのです。ホントカナ）　「陰の声」ウソヤ

まずは自治会祭から。我々の演じましたは、ゆかた姿の仕立屋と王様 ― 主演の彼は、芸術のためには、あられもない花模様の下着姿もいとわぬエラーイ男なのです ― を中心に浅野昭二氏に特別出演を願っての世界名作『裸の王様』。特に王様が下着姿で行進する時は、客席の女性の目がらんらんと輝くし、舞台の上ではみんな笑いとけるし、観客と共に（ほんとは観客は、冷たい笑いを浮かべただけだったのです）我々は楽しんだのである。我々はその時、わがクラスメートもそして浅野先生も、いくらすましても底ハシレテルワイナと互いの存在を認め合ったものだ。

水泳大会。体育大会は「参加することに意義がある」を合言葉に棄権に次ぐ棄権。フアイアーストームや遠足の参加状態の悪さに、担任から「余裕持たなあかん」と注意を受けたこともあった。（ナツカシイ）

しかし、なぜかコーラス大会にはえらく熱心で〝芸術〟を踏んで蹴って固めたような指揮者のもと〝残りものグループ〟とあざけられながらもみごと決勝で二位を獲得したのである。あの日の二次会。三次会は盛大でしたなあ。それから遠足の二次会も……。男女共バスケット大会において二位であったにもかかわらず祝賀会を開催しなかったのが心残り。

いにしへをかへりみるに ― 八組は古典だけはなぜか常に学年の首位を通したのです ― 卒業するのはいやになる。入学試験前だというのに、すばらしく友好的なムードが満ちあふれているし、この一年で多数のカップルも生まれたし（ただし男女に限らず）etc。あとは、同窓会と称して大マージャン大会を催し、浅野氏をカモにするだけが我々に残された望みである。　グッバーイ

3年9組

わが三年九組は通称金魚鉢などと呼ばれているが（理由は三方からまる見えと言うことだ）これはくだらん実にくだらん。第一ぼくは一度もそう実感したことがない。白じらしい。大体テレビや映画の学園ものでアダナつけてキャーッなんてのは実にくだらん。ぼくは赤面する。冬は実に寒い。何言ってるかわかるか。つまり冬が寒いのは当り前でそんなことわざわざ書いたのではなくて、もう気付いていると思うけれど、風がビユービユー入って移動から帰ったときなど震えあがると言いたいのだ。

担任はケムンパスと言って（白じらしい）でもまあ実に似てるからつらい。白いコロナで法隆寺からやってくる。一般的標準的常識的高校教師。

三年生には衆知のことだが二、四、六、八は文科系のクラスで、一、三、五、七、九は、理科系のクラスときれいに並んでいて残念ながらうちは一番下らしいのだ。三年にもなって今だにトランプにうつつをぬかしパチンコ台まで買い入れてあったのだから。

ここに至ってトランプ禁止令が成立公布、パチンコ台は回収、こうして九組はま、言ってみれば鳴りをひそめてしまったのだ。そのショックが後遺症を引き起こしたのか二ケ月ほどの潜伏期間をおいて突如あらわれ、今まで勉強以外なんでも優秀な九組がサッカー大会におき、二点も（なんと二点ですぞ。ペナルティキックで決まるのが当然なあの大会で二点ですぞ）リードしながら負けたのだ。悪いことはさせるものじゃあないぞ。

おもしろかったのは自治会祭での赤フンだ。あのスタイルは筆舌には尽しがたいもので常人などは必ず羞恥心が勝ってあんなまねは出来るもんじゃない。抱腹絶倒と言うか、へそが茶をわかすと言うか。大したものだった。

話変わるけれど、高校生活とは実に白じらしいものでうまく書けないんだが、日本語に『のる』と言う言葉があるけれど高校生活においてその『のる』が出来にくい。（悪のりなんてのじゃない。）九組においても（『おいては』かも知れないが）白ける時が往々にしてあった。それにつくづく思うんだけど理科系とはつまらんですなあ。念のため書いておくけれど女子が少ないんだ。

ぼくはこのわずか原稿用紙三枚の文章を書くのに三日間も時間をかけた。そして、この文章がその成果と言うわけなんだが、これはちょっと相当猛烈不愉快なことではあるまいか。

クラス紹介　おわり

「ことば」

「永いこと考えこんでいるものが、いつも最善のものを選ぶわけではない。」　ケーテ

「人間は、重要なことを、けっして充分じっくり考えない。」　ゲーテ

「完全に矛盾のない人間は、たゞ死人だけである。」　ジュリアン・ハックスリイ

「なにもかも失われたときにも、未来だけはまだ残っている。」　ポピー

「生きる技術とは、ひとつの攻撃目標をえらび、そこに力を集中することにある。」　アンドレ・モロア

「苦悩は活動への拍車である。そして活動のなかにのみ、われわれはわれわれの生命を感ずる。」　カント

「人間よ、汝、微笑と涙とのあいだの振子よ。」　バイロン

「自制することのできない人を自由の人とよぶことはできない。」　ピタゴラス

「迷誤へいたる道は無数にある。だが真理へいたる道はただ一筋だ」　ルソー

先生の紹介

朝田先生　佐野先生　近松先生
長谷川先生　渡辺先生　広田先生　椋井さん

朝田先生

イヤダ、イヤダとか、モウォーモウォーとか、アカン、アカンとかを連発したのに、その効もなく私が朝田先生の人物紹介をいたすしだいになりました。べつに朝田先生をどうこうって言うのではないのですョ先生。ほんのほんのささいな事が理由なんですから。

（筆者、原稿用紙をみて身震いする。）

さてさて、ここで本題の朝田先生紹介とまいろうでさないか。

彼、姓は朝田、名は、嘉蔵。字は「抹香くじら」「鉄仮面」「長老」など数多く、中でも不可解な「抹香くじら」とは何ぞや。岩波国語辞典によると「くじらの一種。歯がはえており、くじらひげはない。頭部が大きく四角い。優良な油がとれる。」と記されている。「古の長生先生に謂げ」という文句(?)がある程いろいろな事を御存知である。お年とはいえ（先生ゴメンナサイ）、お花御殿とよばれる先生の家の庭園には年中、何百本（ちょっとオーバーかなかの花が咲き、そして、日曜など、オペラに耳を傾けている先生の姿を想像してみようではないか。諸君！（筆者ここでまた身震い）また、クラスのお驚き。などには、快く出席してくださり、お得意の「別れのブルース」や、（ふるい歌なので題をわすれた）「ドンとドンとドンと波のりこえて～～～」を聞かせて下さるやさしい先生でもある。授業中は、時として、戦争の話をしてくださるが、手にもったチョークでチョーク箱の中の数本のチョークをころがしながら「戦争なんてばからしい。まったくつまらぬものだ。」といわれる先生の顔を「ステキ」とはある女子の声か。一見、きびしそうだが、ほんとうはとうしてどうして、男女交際には、理解もあり、家の庭のリンゴの木に実のなる日を楽しみにしておられるような心の暖くやさしい先生なのです。

ほら、そこの君！小さくなってないで先生に話しかけてごらん。きっとステキな微笑がかえってくるヨ。

佐野先生

本名は、佐野富士弥。フジヤと発音するので、菓子会社の宣伝ではないが、入学早々、「ペコちゃん」という名を命名されたそうだ。

佐野先生は、ご存知の通り佐野氏そのものである。ある組織の消息筋によると、オコサマは二人で、上の子は幼稚園だとか……。どおりで、「タイガーマスク」や、「アタックNo.1」を歌われると、筆者以下、担任していただいている一年六組の野郎どもは、腹をかかえて、大喝采したものだ。この次は、「マグマ大使」の歌を教えていただきたいのですが……。

そうそう、歌というと、朝のホームルームの時間に、カセットに入れた曲を聞かせてくださったことがあった。若い時の思い出話や感動した映画の紹介、人生について…etc。あの、ぽつり、ぽつりと、口から出てくる話は、聞く者の胸を打たずにはいられない。

クリスマスパーティの夕べに、「雪は降る」が甘い調べとなって教室中に響き渡った。とにかく、ギター伴奏の人を完全に無視するその歌いっぷりには敬服する点がある。つまり、この一見カタブツのようにみえるが、何かしら、人の心に訴えるような、そんなムードが漂っている。

ここで、筆者が書き洩らした事がある。この先生は、地学科担当なのダ。この大手前に入学した諸君ならだれでも一度はお世話になるというしくみになっている。この先生の授業で、めだつ点は、コンパスを使わないで、黒板に大きなサークル（円）を書くことである。北の周極星などを習うと、どうしても円が必要なのだが、あの首をちょっとかしげて、ものの2秒もしないうちにサッと描き上げると、コンパスを使うよりもきれいな円ができ上がってしまう。筆者がまねのできない事である。

もう字数の制限に近くなったので、最後に佐野先生の言い残された言葉で終わりたい。

『珉珉（ミンミン）には詩がある』

近松先生

我が二年七組のよき担任であり、私達皆の親愛なる近松淳一先生について、どう御紹介しようか。先生いわく〝世界的文豪…〟であり〝曾根崎心中〟や〝心中天網島〟で有名な浄瑠璃作家である近松門左衛門とは、全くのところ何の関係もない。しかし先生は心秘かに、同姓であるところの親近感を抱いておられるようだ。先生という方を先ず一口で言うなら、たいへん親しみ深く、温厚なヒューマニストでおられる、という事だろう。そして熱心な愛国者ならぬ御自分の生まれて育って、今も住んでおられる。ー先生いわく「三つの子でも知っている？」平野という土地の愛郷者でもいらっしゃる。（この「三つの子でも知っている……」というユニークな言葉をフルに駆使して、授業はしばしば我々を笑いと？の煙にまかれるのである。）

とにかく、お顔も声もそして授業もとてもユニークであられる。その魅惑的なハスキーボイスで、「あのですな…。○○は～～～なところの……なのであります。オイ、ちょっとそこ静かに…。」という独特な口調は、私達にたまらない懐しさ（？）を感じさせら

れる。そして、黒板いっぱいにところ狭しと、縦に横にはたまた斜めに、単語（日本史etcの用語、語句のこと、ただし文ではない単語なのだ。）を書きまくられる。それも昔風の草書体で、それ故ウトウトつい舟を漕いだ後で、黒板をいくら穴のあくほど見つめてさっきの授業を理解しようとがんばってみても、はなはだ困難なことなのだ。（筆者はそれを身をもって体験済みである。）また授業におけるさまざまなお話も生徒の楽しみの一つだ。先生はとても話し上手だ。平野のこと、幼い頃の思い出話（先生の実家はお寺である…）以前にいらっしゃった鳳、桜塚高校のこと、旅のこと、昨年の夏に行って来られたヨーロッパのこと等々…。話の泉はつきることを知らないのである。先生の口にかかると、大多数の有名人が、知人か友人か教え子になってしまうが…しかし教師生活三十年余というものがものを言っているのだろうか。そうは言っても先生は、まだまだお若いのであるが……。ベテラン、円熟の境地におられるという所であろう。そうそう、それから先生はたいへんな愛煙家でもいらっしゃる。修学旅行のスナップ写真を眺めていた私は、ある一定の法則を発見して驚いた。（少々オーバーだが…）それは、先生の写っておられるどの写真を見ても、ほとんどが煙草を手にしておられることだ。

担任の先生としても、その温好で、飄々としたユーモラスな人格によって、私達の信頼と親愛の的となっておられる。

誠実そのもので、意外にハニカミ屋、そして高所恐怖症であられる我らが近松先生！　私達に微笑みかけられる慈悲深く、優しい仏様のような瞳ーそのメガネの奥に時折、キラリと光る影は、永遠の〝若さ〟〝青春〟だ!!

長谷川先生

とにかく、誰が何と言ったって、何も言わなくたって、長谷川先生に教えてもらえる人はシアワセなのです。理由はタークサン。もったいなくて、とても文章では表わせません。でも、書きます。

ブーン、この音が聞こえてから約25秒後。カーンキ！ンコーンカアーンポワワワン。（これは、始業の鐘の音）そして、それから約40秒（一部に60秒説あり）。パッタンタンタタ、タタタ、ガラッ。教科書、プリント、地図帳等、七つ道具を小脇にかかえ、我らが長谷川先生の登場であります。巻いたばかりのねじ巻き人形を想像してください。まさに、あのとおりなんだから。（先生、スミマセン）まず最初に、出席をとられます。「○○サン。」（キョロッ）「××クン。」（キョロッ）ある日なる人物が、ある時、あることをして、「クン」をつけてもらえなかった以外は、かならず「サン」「クン」をつけてくださいます。本当にやさしい先生なのです。だから、女子にモテモテなのデスネ。（先生の口グセ。一時間に209回という記録アリ）みかん狩りの時も、チョコレートをくれはったし、紅葉の下で、いっしょにお弁当食べたし…。（ただし、女子のみ）それになんといっても、先生のテストがイキなのです。絶対、30点はとれるようになってる魔法のテストだし、あの自由欄を楽しみにテストをうけてる人もいるとかいないとか。この自由欄は、何を書いてもいいのです。東海道線の駅名から、ポヤキ、おわびに至るまで。そして、ちゃんと返事も書いてくださいます。それに、先生はユーモアたっぷり。アチーブ代を入れてわたしたドロップのかんを

返してもらったら、中にアメが入っていたという話は、グアム島にいた、横井さんも知ってはったとか。それに先生はのりやすいのです。試験の前などは、ついついのせられて、しゃべってしまわれるのです。「〇番は、電力……アッ！」もう、おしまい。だから、人気も倍増なのです。もちろん、まだ独身。教室内では標準語。一歩出ると、大阪弁。話しやすいし、おもしろいし、おにいさんみたいな先生です。

こんなに、いっしょうけんめい、いいこと書いたのに、どうして今日は、お休みだったんですか？

渡辺先生

大阪市出身。推定20代後半（戦争中に生まれていたとか。）大手前高校を経て、京都大学を修了後、（くわしくは大阪府教職員録参照）母校に奉職し現在にいたる。ニックネームはまだなく、一般に呼び捨てにされているが、本人はせめてさんずけで呼んでくれといっている。

先生の授業をのぞいてみよう。先生は、他の先生とちがい、両手にかかえるくらいの資料を持ち教室へ乗り込んでくる。時として、かばんに入れてもってくることもある。教壇に立ち、全員が授業の用意を終え、姿勢を正すまで礼をさせない。無論、1人でもロッカーへいくと帰るまで礼は行なわない。彼は、これで授業の始めのけじめをつけているつもりらしい。そして授業が始まる。わがクラスは、先生が担当しているクラスの中では、例外的に静かなのであろうか。先生のしゃべることは、よくききとれる。しかし、先生のしゃべることは、自分で自信のないことまで含まれていることがある。教壇に立ちながら、自問自答しているようなことがあるからである。そのときは自分のいうことに完全に自信を持てないのだ。しかし、そのことのおかげで、指名されて答えられない生徒には、深い理解を示してくれる。今度は板書が、はじまる。この字が、問題なのである。先生は自分の字に自信があるのかもしれぬが、生徒の字に関する質問に要をえない返答をすることがある。しかし、なれとは、恐ろしいものでだんだん判別できるようになってくる。もうすぐチャイムが鳴るというころになると少しあせってくる。予定をすませうと思うからだ。チャイムがなると始まりと同じ礼をしておわる。休憩時間にくいこむと礼がなくなる。このさい、始めのチャイムに遅れたら礼をやめにしてはどうかと思うのだが。

先生は地理を担当しているのだが、テストでは、先生のクラスの平均が学年平均を下回わり、いつも反省しているにもかかわらず生徒の協力もなくいつも向上につながらない。次に先生自身の自己けん悪なるものを紹介しよう。

『自己嫌悪を活字にしたことはあまりないのでそれはやめて、少しばやかせていただく。

どうして右の文にホメ言葉がないんだ。批評文でも一アゲ二サゲ三アガリといってホメルものだ。それが礼儀だ。ましてこれは紹介文じゃないか。十年前の僕なら師に対してこんな態度はとらなかった。（ホントカシラ）このごろの生徒は ー ブッブッブッ』

広田先生

広田恒一―↑。俗称ポッコリ、自称ポッコリ、学名ポッコリ。御幼少の頃は、四国の山奥においであそばされ、やがて大阪へ出て末はペン＝ケーシーか、ケーシー高峰かと、大いに医学の道に励まれたのであるが、どこでどう間違えたのか、紙とエンペツだけでできるという手軽さに魅かれ、数学の教師として現在に至っておられる。大手前においては、進学指導の大家であり、今（ホントの今）我が二年六組のお師匠さんとして、微分を教えておられる（あっ！目が合った）

先生の授業は、もう授業というものではない。教科書、参考書類は持参経験ナシ。それでいてあれだけササッと問題が解けるのは、やはり巨匠か天才か?!

板書の字がこれまた非常に前衛的である。タテ、横、ナナメ、正弦45°、正接60°、あらゆる方向にお書きになる。黒板だけでは物足りず、カベ、柱、ガラス、天井（やり過ぎ）など、可能な限り、チョークで埋まってしまう。

先生の美点は、何といっても女子に親切なことである。机の前にドッカと陣取り、手とり足とりで教えて下さる。それにテストの前にヤマを言ってもらえるのは、何といってもありがたい。

数学の才能に関してはもちろんであるが、先生は世界史や英語などにも秀でておられるようである。しかし後者は、九月にアメリカからの留学生と問答して以来、やや影がうすくなった感じはあるが。

「かいらしナ」「アホジョ」「ポッコりいきま」等の一連のポッコリ語は、クラス内にも相当普及している。

ところで、大手前の先生でカップルをイビルことにかけては、ポッコリ先生がまさに第一人者ではなかろうか。すでに我クラスでも血祭りに上げられたカップルは数知れず、そのおかげで人知れず涙した女のコも幾千万人である。

なんかメチャクチャ書いたようであるが、本当は、熱心かつ純情かつ高貴かつ情が深い先生であります。

只一つ、テストの採点をもう少し甘くして下さるよう、影ながら願っております。

椋井さん

大手前の敷地の南西のすみっこ、大手前の僻地の生物地学のところに棲息する若いおねえさん、その人が実習助手の椋井あけみさんです。ムクイと発音します。本校定時制の卒業生で現在大学在学中です。夕方の五時以後は大学一年生になるわけです。年令はいろいろの推定はありますが、私たちより年上であることだけは確実です。身長は一六〇センチあるのに他人からは一五五センチに見られているかわいらしい女の子と自称して居られます。

いつも白衣を着ています。（ボロの服をかくすためかそれとも美しい服がよごれるのを防ぐためか結論はでていませんが）白と対称的に黒い縁のメガネをかけて（生物地学は先生も皆メガネ愛用者）元気に忙しそうにスキップしながら学校の中を歩きまわっています。誰でも一日に数回以上このおねえさんにあうはずです。

52頁へつゞく

他校訪問記

北野高校　扇町商業高校　明星高校
淀川工業高校　寝屋川高校

自治会本部
文化部

北野高校

北野高校を訪ねて、僕たちに最もおおきな示唆をあたえてくれたのは、やはり、自治会活動に関することだと思う。

執行部が成立していないというので、僕たちに会ってくれたのは前期役員と、今の議会の議長・副議長の人たちであったが、彼らは一様に、自治会員の自覚のなさを嘆いていた。例えば、六十人の代表者で構成される議会に半数以上出席する事は、ほとんどないそうだし、また、文化祭などでも、仮装行列などを除いて、個人主義が露呈するという。

先に、執行部が成立していないということを書いたが、そのため日常的な行事類は、議会にその都度はかり、実行委員を決めて、行われるという。それ故、活動は、必要にして最少限だけしかできないそうだ。

ところで、注意しなければならないのは、僕たちにとって為すべきことが、この状態を知って安心することでも、いわんやこれを批判することでもないということだ。僕たちも結局は、（執行部はあるけれど）あまり変わりがないのだということを認識することだ。と思う。執行部のないことが、良い状態であるとは、勿論、云えないが、惰性で出来ている執行部が良いとも、勿論云いきることはできないのだから。

制服のことなどについても、個人的には、反対している人がいるだろうが、まとまった声にはなってこないということであった。

これらのことからかどうか分からないが、学校側は強力に自治会に協力していますよ、と自治会顧問の先生は言っておられた。ここに、そのことについての感想を書くと長くなるので省略する。

さて、他に特筆すべきは有るか無いか。むむ、自らに都合の悪いことは忘れてしまおうとする、心理の自然な働きの故でか、遅刻のことが忘れさられようとしていた。そうなのだ。北野では遅刻に関しては、大変恐しい、恐ろしすぎて形容のできない程、厳しい意識があったのである。

また、授業は非常に熱心で、授業中には、物音一つ聞こえてこない程だそうだ。何故かは、よくはわからない。先生は、このことについても自慢しておられた。

総じてみると、北野は、いわゆる真面目な学生、学生、学生に満ちている学校であると思われた。大手前とはかなり異なるように感じた。

扇町商業高校

校門をくぐると、大手前の老朽化した建物とは比較にならないほど新しい端正な校舎があった。校舎の中へ入っていくと、女子、女子、女子。まるで女子校である。この学校では、男子が女子の五分の一しかいず、一学年八クラスで、女子だけのクラスが四クラスあって、残りは男女混合組である。

執行部についていうと、運営部ー生徒会全般の活動組織ーと、実行部ー各委員会の活動組織ーに分かれていて、執行部の役員はみめうるわしき六人の乙女であった。

執行部の選挙は、運営部が一月と七月、これは、新入生の危険な選挙権と三年生の最後の投票権の行使のためである。実行部の選挙は四月と九月である。

学校行事は、新入生歓迎会、校外授業、文化祭とか、大手前の行事と同じようなものであるが、おととし予餞会がなくなって、文化祭が一日であったのが二日になった。

この学校では、大手前における、月曜日にあるあの朝礼というものがなく、学期末にだけ集会がある。我校においても朝礼をなくしていただきたいのであるが。（筆者の個人的要望）この学校における服装については、髪型とソックス、シームレスに規則があって、たとえば髪型にはパーマをかけてはいけないとか、黒のソックスのときに黒のシームレスをはいてよいとか。扇商の女生徒はこの規則をみんな守っていたようである。

制服についていえば、自由化の要求というのは、一部のものから、しか出ていず、あまり問題になっていないので、具体化されていないということである。それよりもむしろ、前述の服装の規則（これは生徒によって作られた規則ということであるが。）に対する反発の方が強い。

訪問を終えて、校門を出るときに、またこの学校にくる機会があればよいのに……と思ったのは、筆者ひとりではなかったようだ。

明星高校

一月二十四日、小雨の降りしきる中を明星高校へ行ってきた。「私立の男子校」というなんとなく浮かぶ独特の印象を筆者も持っていたのだが、校門に入るとそんな感じは、なぜか消えてしまった。玄関正面には、初代校長J・WOLFF（一八五二～一九二五）と彫られた白い像が立ち、もう放課後だったからだろうか、ひっそりとして時々運動部の威勢のいいかけ声が聞こえていた。

校内に入ると、どこかのきれいな学校を見慣れている筆者は、「これが学校であろうか？」と不思議に思ってしまったほど、整然として、清掃が行き届き、広い廊下、サッシの窓……　ほんとうにうらやましい限りで、筆者などは、転校してしまいたい位であった。

さらに通された所が、どこかの一流ホテルのロビーのような部屋で、豪華なシャンデリア二つ、フカフカとして、筆者などは沈んでしまいそうなソファ……公立と私立の差である。

しばらくすると、明星の生徒会の役員五人と、顧問の先生一人が入ってこられた。

見るからに男らしくかつ紳士的な感じの五人に、同行者女子三人は

ほればれとしてしばらく口もきけなかった。（ファンタとパン一つもらったのだ）「ああ、もう絶対転校する。」と決意を固くした筆者ではあったが、明星の話しを聞いているうちに絶対転校できないことがわかってきたのである。

一、男子校であること。

一、八時二十五分になると門が閉まり、遅刻を三回続けると、呼び出され、さらに多くなると親が呼び出されること。

一、清掃状態が悪いと次の日またやり直されること。

筆者だけでなく、大手前の生徒ならば、ほとんどは、この学校の生徒にはなれまい。毎日親を呼び出されなくてはならないし、万年清掃係りを務めなければならない？だろう。

何もかも正反対だと思っていたが、同じ事が一つあった。生徒会、自治会における生徒の三無主義。私立公立の別なく高校生の共通する問題なのかもしれない。

明星では、委員会は三回に一回は、流会するそうだし、大手前としていつも流会寸前ぐらいだから変りはあるまい。

また一般的に私立の方が生徒の発言力が弱いといわれているが、明星も例にもれず、生徒主催の生徒総会や、ロングホームルームが、禁止されていて、大手前がうらやましいといわれたが、自由に行うことができても、大手前のように生徒の協力がなければ、五十歩百歩ではないだろうか？

生徒会、自治会への生徒の関心を盛り上げることが、今度両校共通の課題であるように思った。

最後に「女子がいなくて不便ではないか？」との問いにきっぱりと「そんなことはない。女子は必要ない。」と言われた。でもこれは、おそらく負け惜しみであろうと思いたい。

女子がいなかったら不便ですよ。女子の価値がわかる大手前の男子は幸せダナー。

淀川工業高校

一月二十四日月曜日。その日は昼ごろからの雨で、守口駅から十五分ほどの所にある淀工への道は、また一段と長く感じられた。着いたのが予定よりだいぶ遅かったので、すぐに質問にかかった。

まず、我が校でも問題になりつつある制服の問題について。アンケートなどをとって調べてみると自由化に賛成の生徒が多いらしいのだが、先生、特に生活指導部の反対が強く自由化案はまだ具体化されていないそうだ。しかし、夏物のカッターについては、すでにカラーシャツも認められるようになったということだ。しかし、先生側は、自由化の必要性をはっきりするまで自由化については考えないそうだ。ちなみに、本部としてはどう思いますかと尋ねたところ「反対です。」とあっさり言われてしまった。

次に、自治会への関心度などを尋ねてみたがどこも同じで、三無主義を通り越して四無主義、五無主義がはびこっているそうだ。淀工の自治会役員の改選は年一回。しかし、選挙はなかなか一度ではすまない。というのは、たとえ立候補者が一人しかいなくても、みんな不信任にされてしまうからで、そうなるとまた改めて選挙が行なわれる。それの繰り返しで一度の改選に三度まで投票が行なわれるそうだ。その他の行事も割合多く、予餞会、駅伝競争、文化祭などを中心として、水泳大会や卓球大会、果ては五目並べ大会まであ

るそうだ。体育祭は昨年は行なわれなかったらしい。クラブ活動が非常に盛んであるが、一度入ったらやめられないという。つまり、上級生には、絶対服従なのである。

続いては、食堂のお話。狭い、きたない、まずい、はいずとも同じ。パン類は本校より十円ほど安いが、その反対に、カレー、うどんその他はすべて本校より高い。その理由がまた不思議で、一部が食器代にまわされるのだという。というのは、食堂の食器をみんなどこかに持ち去ってしまって、半分ほどしかもどってこないそうだ。食堂には給食係のおばさんみたいな人がいて、いつも食器を捜しに教室などまわっておられるそうだが、それでもこの有様。もっとみんながきちんとしてくれれば自分たちにとっても得なのに…と、本部の方が嘆いておられた。

それと、もう一つ驚いたことは、落第する人が非常に多いということ。昨年の一年では一クラス最高九人の落第者がいたそうだ。また、一年生のとき美術を落とすと進級できても卒業できないそうだ。とにかく、勉強に関しては非常にきびしそうな感じがした。

終わり近くになって再び三無主義についての対策を尋ねられたが聞きたいのはこちらの方であった。自治会への無関心、無責任、無気力は、どこの学校に於いても共通の深刻な問題であり、この問題を解決するのは、やはり我々　員一人一人の自覚しかなさそうである。

寝屋川高校

府立寝屋川高校にはいったとき、我々を、迎えてくれたのは、ゆったりした箏曲部の琴であった。

明るくて、のびやかな学園。校舎は、どれをとっても我校のそれよりは新しく、視聴覚教室などの特別教室、トイレも多い。体育館は、昨年新築されたばかり、食堂も　以前のものが狭かったため、目下、二際建てを　建築中。部室は、文化系、運動系と、揃っている。まわりにビルがないためか、遠くに生駒山が、連なって見える運動場も、広々としている。我々は、我校も、同じ府立の学校であるか、疑問に思えてきた。

秋に、行なわれる学園祭は、全校の各クラスが、展示や、舞台で参加する最大の行事である。二日にわたって行なわれ、二日目の夜の後夜祭には、ファイヤーをたき、フォークダンスの輪をつくり、なごりを惜しむそうだ。他に、対四条畷高交歓、球技大会など、我校と同じような行事がある。しかし、行事の盛りあがりや意気ごみは、我校より高いと思う。それに、行事の運営、企画などは、一般生徒から成る。各実行委員会が、主体となってきめるから、自然に関心も高くなるのであろう。

昔、寝屋川校も我校と同じように、女学校であったためか、女らしい感じが、校舎に、生徒に漂よっていた。しかし我校の古くさい感じ

ではなく、番茶も出花といったような、若々しいムードにつつまれて躍動しているように思えた。

我々が、訪れた時、土曜日の午後も、だいぶ遅かったのに、校舎と体育館との間で、男女生徒十数名が、バトミントンやバレーをして遊んでいた。どの顔も、明るく、はしゃいでいた。なんの屈託もなかった。青く澄んだ空、きれいな郊外の大気のもとで、のびのびと、学園生活を謳歌しているように見えた。

先生紹介

椋井さん　つゞき

（47ページより）

実験実習のとき、先生とともに生徒のやり方を見てまわられます。質問をすると何でも「先生にきき」といわれます。先生にきくと叱られそうなことやききにくいことを椋井さんにきいているのに…。多分持ち前の「つゝましやか」を発揮しておられるのでしょう。こっそり教えてほしいと思います。

生物は生き物をとり扱うので生き物を死なないようにするのも仕事です。朝顔の種子をまいて水をやったり熱帯魚の数をふやしたり変な微生物を培養して生徒を困らせたり……。それだけでなく、「かわいいミケ猫ほしい方ありませんか」と広告を出すこともされます。ついでに「かわいい男の子と交際したい方ありませんか」と私たち（イキモノですよ）の世話もしてほしいと思います。

私たちにとって、よりいっそう親しいやさしいお姉さんでありますようにねがっています。

表紙はかく語る

・

犍陀多には、極楽が約束されていた。しかし、蜘蛛の糸を昇りつめた僕達が見つけるのは、そこが極楽でありながら、しかも地獄であるということである。そして、僕達は、涅槃の境地を願い、そんな風に輪廻する自分に絶望するかもしれない。しかし、さらに、考えてみると、僕達は絶望に希望しているのだ。

キエルケゴールは言った。

全ての人は、絶望している。絶望していないと思っている人は、正にそのことにおいて、やはり絶望している、と。

この弁証法を応用して、僕はこう言おう。

全ての人は、希望を持っている。絶望していると思っている人は、正にそのことにおいて、やはり希望を持っている、と。

僕は、そのような人類の偉大な生命力に、うたれずにはいられなかった。

蜘蛛の糸を昇る、表紙の人間は、それを、象徴している。

2ノ1　石間　毅史

月と牛車と・・・

（信州の昔話から）

絵と文　向井里美

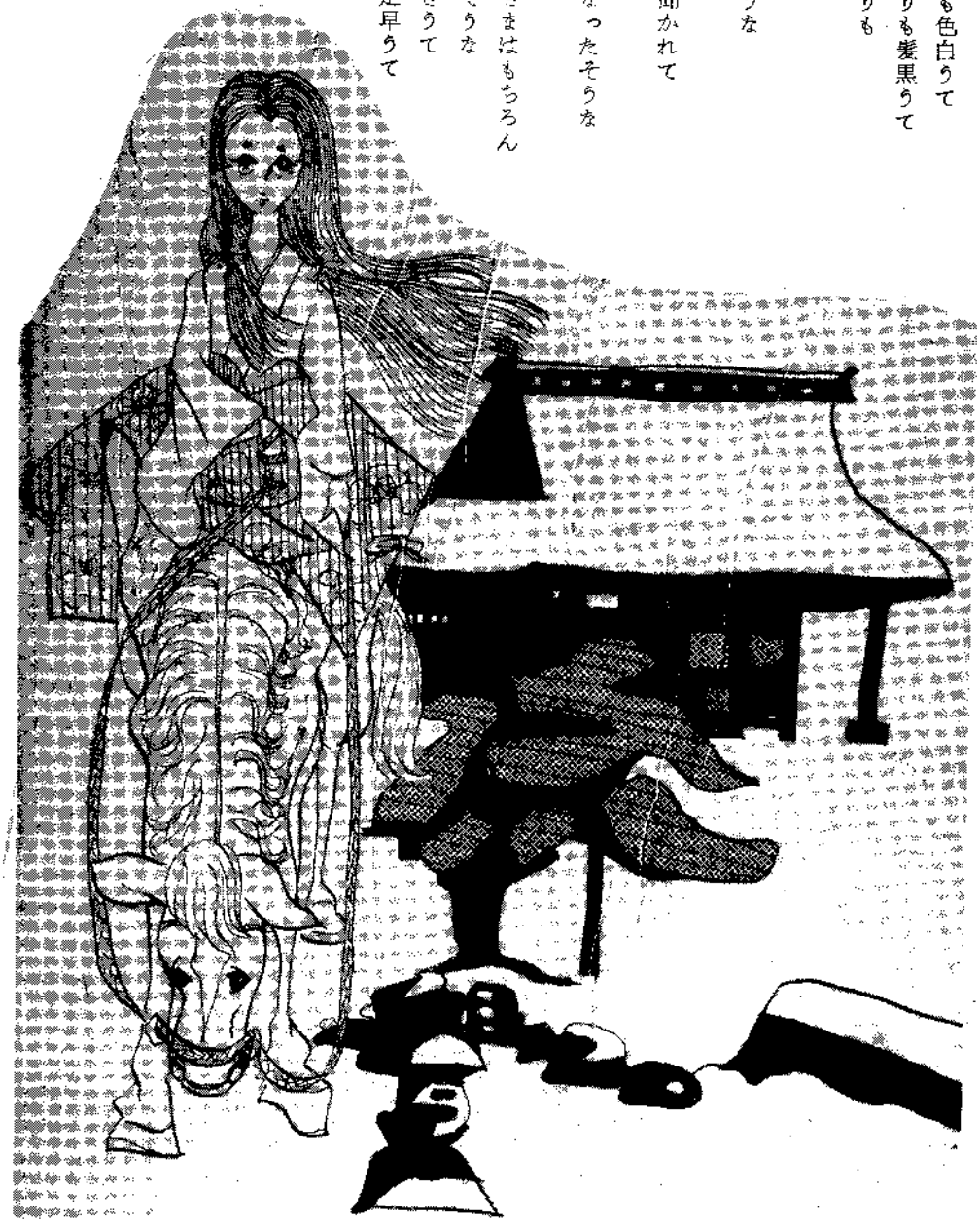
（2ノ3）

しらしらと流れる川　北に分けて
ゆらゆらと続く葦原　東と越えて
月と牛駒と姫君と　望月の里の物語

さてもむかし
ありしかなかりしか　知らねども
あったとして
聞かねばをとめぞよ

昔むかしのことじゃそうな
山の谷をかんと越えたところに
望月の里があったそうな
望月の里には
長者様がいたそうな
長者様には娘が一人あったそうな
名を牛駒姫といったそうな

万年雪のどの雪よりも色白うて
わだつみのどの藻よりも髪黒うて
山谷のどの鹿が鈴よりも
　声澄みきって
それはそれは美しい
　姫さまじゃったそうな
都の天子様が
　姫さまのうわさを聞かれて
とうとう
　姫さまをお召しになったそうな
長者様が自慢は　姫さまはもちろん
つき毛の駒じゃったそうな
山のどの馬よりも大きうて
谷のどの早瀬よりも足早うて



一日に千里も駆けたそうな
それはそれは
りっぱな駒じゃったそうな

いつごろからは　知らねども
駒、姫さまに　恋したそうな
恋しこがれて　物憂れえ
憂れうあまりに　食べもせず
食べぬあまりに　やせ細うえ
細ろうあまりに　弱っていったそうな

長者様　驚いたそうな
どんなになだめすかしても
かいばに　口もつけず
つけぬゆえに弱っていくと
　嘆いたそうな
嘆いてえんの行者様に
教えをこうたそうな
えんの行者様
一日　駒見て　ゆうたそうな
生駒姫が手で
かいばを与えよと　いうたそうな

生駒姫　お気に入りの駒がために
自ら　かいばを食わせたそうな

毎朝毎夕　鼻づらなでてやったそうな
ほゝすりよせてやったそうな
駒　まえよりももっともっと
姫さまにこがれたそうな
こがれて長者様に頼んだそうな
姫さまをつき毛の駒の嫁にくれと
何度も何度も頼んだそうな
長者様　困ったそうな
天子さまのお召しをうけた姫さまを
駒ごときにやることはできねども
姫さまと添うことかなわねば
駒　死ぬというたそうな
姫失いたくなし
駒失いたくなし
長者様　困ったそうな
とうとう長者様　駒にゆうたそうな
昼は明け六つ時に始まり五つ時までに
里を三周してみよとゆうたそうな
みごと三周できたなら
姫さま駒の嫁にやると約束したそうな

六つ時が鐘　鳴るやいなや
つき毛の駒　駆け出したそうな
姫さま嫁にしたさに駆けたそうな
一周、二周 ― 駒　駆けたそうな

目ん玉はかすみ、心の臓はりさけそうな空とも
駒、姫恋いしさのあまり駆けたそうな
三周も半ば　長者様が館は
もすぐそこだと耳をすりぬける風が
励ましたそうな
もあと半里で、五つの鐘が鳴りとよんだそうな
駒　館につけず
駒　姫貰えず
その場に倒れ
くたくたと ― 倒れ ―
血を吐いて ― 倒れ ―
― 死んだそうな

実は長者様　姫かわいさのあまり、五つの
鐘早く鳴らしたそうな
駒死んで姫さま泣いたそうな
だれにもみられぬよう
たもとの陰で　泣いたそうな

明日は天子さまが都に旅立つ日だそうな
金銀あやとり　天の川のような着物きて
姫さま天子さまが所に嫁いだそうな
てんてんてんてんまりてんてまり
はれのよき日の花嫁いしょう
嫁ごのなみだでよごしちゃならぬ

てまりよめごのなみだにぬれて
はねておどっておどってはねた
よめごはお馬にのりました
ならぬなみだはあふれてこぼれ
てんてんてまりのおもてにおちた
つき毛の駒のその声は
鈴のねいろにかきけされ
もやにまじって　かすんで消えて
よめごは遠い国の人

姫さま　都にたったその夜は
里をすっぽりのみこんでしまうほど
大きな青い月夜じゃったそうな
その夜　里人はみなはっきりとみたそうな
つき毛の駒が　生駒姫をのせて
月へ月へと登っていくのを…
姫と駒は月の世界へ登ってゆくのだと…

昔むかしのことなれば、あったかなかった
たかは知らねど、無かったこともあった
話にして聞かねばならぬ

おしまい！

革命前夜

2ノ1　間　淳郎

ヒトラー

①ヒトラーは独白した。

「大衆とは、観劇の後、拍手を送るだけの白痴にすぎぬ。」

②ヒトラーは、深々とイスに座っていた。

「クィーンを如何に進ませるべきか。――私が動かすのだ。」

③私はヒトラーを尊敬さえした。彼の演技力。統帥力。

戦争

①あの時代は、今以上に平和に溢れていた。ぜいたくにも、私はそれにあきあきしたのだった。

②私はあの戦争に反対しなかった訳ではない。それどころか、徹底的な反戦論者だった。しかし起ってしまってはどうしようもない。私は単なる学生に過ぎなかった。――学生だったのだ。

③私は戦争で人を殺した。恐しくもある種の快楽を感じながら。

――おかしくも。私は、血を見て狂喜した。

④ガス室に牧師がいた。

――堪え忍べ。肉体の苦痛と魂は分離し得るものだ。天国は近づいた。

看手は、冷く眺めていた。――イ、キ、モ、ノ。

人

①人の歴史は、手さぐりで闇中を歩く人に似ている。

それなのに、僕は忘れていたっけ。――僕がいまにも奈落に落ちるかも知れないことを。

②多くの人間の定義は、極めて簡単である。――単純――

人々は、真に生きることを求めながら　次の瞬間、それを忘れる。

③僕のかつての道は、偶然の連続であった。偶然なる人生は、考えざる人間にとって当然の罰である。

できうるならば歴史をば必然にしたく思う。

④押しせまる不安に襲われて、若者は起きあがり、静寂の内なる彼の暗い部屋を見まわした。寒気だけが生の自覚であった。

――絶望とは、このようなものか。

⑤生は明らかに、歓喜だ。――　健康な肉体を持つ人にとって。

死に向かわざるを得ぬ病んだ命にとって、生の歓喜はあり得るか。

――予想よ。

⑥彼は舞台ならずして、生活に於て演じていた。人々は彼のしぐさを笑い、かつ泣き、ときには尊敬さえした。――　ただ彼は自身を舞台裏から見ていた。

⑦天空の星は、真実の存在を暗示する、銀白色のきらめきを持つ。

それに較べ、愛はいまだ仄暗い。

時は人の愛を嘲笑する。――それは、多くの場合　弱さと醜くさをおおうものだから。

⑧愛しておられるのですか　――　勿論ですとも。

革命

①若者は立上った。
「人類に必要なのは革命なのだ。単なる社会革命ではない。真の意味での革命だ。我々が真理を持っていることのあかしの為に。それよりも、生きていることを証明するために。」
②真の革命者は、革命論者に言った。
「おまえは、何のために革命を起こそうとするのか。今の社会すら容易にできたものではないのだ。――そうただ一つだけ欠けているものがあるけれども。」
③彼は、今混沌の中に生きている。彼の踏み出す一歩は、すべての混沌を整理統合分析した結果でなければならぬ。真の目的をもった実践的かつ有効なものでなければならぬ。今こそ、その合理性が必要なときだから。そして彼は真実への過程において、その合理性さえも踏み越えねばならぬ。
④最初の一歩は非常に重要かつ困難である。そのため彼は足踏みしているように見える。

今

①あなたは確かに死を忘れておられますね。
――考えてもしかたがないでしょう。
不死は不可能でしょうか。
――探究しなければわからないでしょう。それも巨大な組織で。
例えばＩＣＢＭ開発組織のような?。
②ところで、日本はいつ核を持つつもりなのですか?
――あなたのお国でしょう?。

END

冬の南空にプレアデスが輝く　生きることは楽しいことさ
あの少女は美しい　そう　彼女はかわいい
それでも革命は必要か　ああ　真の革命は

修学旅行の歌撰集

――二年七組――

蓼科の唐松林バスで過ぐ
りんごの里へ消える小道を　星加　聡

ぼくらのバスただ町を行く連らなって
修学旅行のバスだぼら！　よみ人知らず

夜明け前ふと目がさめてただひとり
心にひびくふる雨の音　舟橋　賢

名も知らぬ小さき駅を通り過ぐ
愛らしき花こぼれほほえむ　杉本　美恒子

村一つ埋もれしと聞く浅間麓
友と歩くはさびしかりけり　西原　清子

―諏訪湖の上諏訪・下諏訪神社の伝説によせて―

ひとしづく一歩あるいてふたしづく
　三歩あるいて湖の白さよ　　古久保　俊嗣

澄みわたる秋天の隅に白き影
　初雪の富士かすみてみゆる　　奈良　隆司

胸にせまり枕にうかぶ処女子の
　夕日に映えたあのほほえみを　　水谷　太

このバスは決して道には迷わない
　時間が来れば行くでしょう　　阿部　淳

闇の中我瞳のみ光る夜か
　友の与えしひとつの衝撃　　河毛　真智子

花は枯れ草も枯れ果て白根山
　土をけりてもたつは風のみ　　矢倉　要

暮れて行く陽は旅の終りを告げている
　しずかな径をバスは過ぎ行く　　井田　依玖子

あらがねの土にしみ入る草笛の
　ひゅるるんと鳴る小諸なる城　　日野　正明

あざやかに色づくりんご手にとりて
　須坂の里の去りがたきかな　　藪田　靖子

想い出だけを心に残し車窓から
　今すぎて行く時のむなしさ　　吉本　幸司

信州の山の寒さに身を縮め
　寄りそう二人のそのそばを行く　　渋江　常規

大空とすすきが原が連なりて
　ゆきつく果ては富士の山なり　　藤本　隆

信濃路のそれこの山の名を問へば
　これはしらねと人の答ふ　　金井　則之

黒四の玉ねぎごはんにおどろきぬ
　このときばかりはふるさと恋し　　佐和　美穂子

善光寺友とまいりしやみの中
　手をあわせて幸わせ願う　　柴山　伸子

信濃路のたのしき日々は過ぎ去りし
　太陽が導く新しき日々　　よみ人知らず

浦島太郎

3ノ4　副島正純

龍宮城が如何なる所であるかは、残念ながら僕にはよくわからない。そこは絵にもかけないほど美しく、絶世の美女たる乙姫様も居るとか。浦島太郎はここでしばらく生活したそうだ。すばらしい世界にすっかり心を奪われてしまったのだろう。しかし、だんだんと故郷が恋しくなり、遂に帰る決心をする。

浦島太郎は、そのまま近世代の人間だ。みかけの「文明」のみにうつつをぬかしている浦島は龍宮城の華麗さにすっかり陶酔してしまったが、そのうちに心に空虚な所があるのに気がつく。そして故郷へ。幾らかの現代人も、人類の故郷の価値に気がつき始めた。

ノーカー運動とかいうものも、その現われの一つであろう。一定期間に一定区域内から自動車を締め出し、その良さを住民にわかってもらい、ひいては自動車に奪われた自然や、各人の権利返還要求の市民運動に結びつけるのが狙いだと主催者は言う。もしこの企画についての会議に僕が出席していたら、僕はきっとまっかになってこの案に反対し、むしろ一定期間極端に自動車をふやすことを提案したであろう。

果たしてこの「ノー……」が本当に市民運動に発展するだろうか。むしろ逆効果になりかねない。常に公害に包まれて無気力な生活をおくっている人々は、しばらくの間あのいまいましい鉄のかたまりを見ずにすむことに喜び、その為に更にふえ続けていくそれには気がつかなくなるのではないか。一頃マスコミを風靡したゼンガクレンのおニイさん達も、「打倒公害源」「打倒非人間」とでもスローガンを掲げ、レジャー用の車ばかりうッ壊して歩いたら、街頭カンパももう少したくさん集まったことだろうに。

では、いっそのこと一定期間中に極端に自動車をふやしてやればどうなるだろうか。もし人々が耐えられなくなれば、必らず運動を起こすに相異ない。運動が起こらねば、自動車業界は安心して更に量産に励むことができるし、役所も頭痛の種が一つ減るから、どちらにしても結構なことである。

「ノー……」は、従って面倒な運動を起こすのを防ぐ働きをするわけだ。機械文明に疑いを抱き始めた人種をなだめようとする偽装作戦である。行政の善進だと単純に讃えるむきもあるが、その影で尚増加一途を続ける自動車のことに気がついているのだろうか。

「ノー……」という言葉自体が実に腑抜けである。なぜ日本語を使わないのか。語の響きそのものも、どこが抜けている。この名称を考案した人間は、きっと西洋かぶれの頭の悪い奴だろう。

地下街には、最近まことにいろいろなものができた。「川」や「泉」や「滝」はては「空」までである。失った人間性と取りもどそう——というのがうたい文句だ。本物の自然は工業に喰わせて、人間は代用品で満足せよというのか。

カルキの「水」や冷たい「空」に生命は存在するのだろうか？

森林の一部を伐採したところ、山肌が見えて、また災害のおそれがあるというのでコンクリートで

固めたが、周囲の緑と調和しない為に緑色のペンキを塗った「役所」があったそうだ。常識以前の人間性を疑う。

造花には色も形もあるが、匂いがない。そして、その欠けているものこそ花の生命なのだ。絵画や写真の花の方が、本物より色彩的には美しい。しかし、それでも尚かつ実物が好まれるのは、そこに生命があるからだ。有名画家が描いた花より、庭から、あるいは花屋からもってきた花の方が、多少色はまずくても心をなごませてくれる。（これに反対する者が居たら、僕はその人を人間として扱うことを拒否させてもらう。）

浦島太郎は玉手箱をあけたとたん、老人になった。我々も、そろそろ玉手箱をあける時期にきたようだ。果たしてそれは、老齢位で我々を許してくれるであろうか。——

源氏物語

3ノ7　堀　幸雄

さて蛍源氏殿、大手前に入らせ給ひし時より、あまたの手児奈に懸想したまひけれど、うたてのものよとうちあはめられ悉くふられ給ひぬ。

さありし事どものせいにかありけむ、欠点いよいよはなはだし。たえかねて師、秘かに招きて「あはれこはいかに、うつつともおぼえはべらむ。」とのたまう。源氏殿言ふ方なく点だになきあまたの答案をひきやりて、はらはらとうち泣かれぬ。師あはれにおぼし召して「この世はかかる事もあり、泣くほどの事もあらじ」とのたまへば、源氏殿、歌ひて　「この世をば地獄とぞ思ふ新月の満ちたる事もなしと思へば」これにはいとど御心苦しうおぼしやらせて　返し「世の中に絶えてテストのなかりせば学校生活楽しからまし」一月後、追試仕うまつらせ給ことかや。

スプリング　第十二号

昭和四十七年三月二十日　印刷
昭和四十七年三月二三日　発行

非売品

編集者代表　石間　毅史
発行者　大手前高校自治会文化部
発行責任者　文化部顧問・桑原　啓
印刷所　ナニワタイプ有限会社　大阪市南区松屋町二一　電話七六一三五六二
発行所　大阪府立大手前高校自治会　大阪市東区大手前之町二